
とある学生の絶対時間(エンペラータイム)

@トレード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学生エンペラータイムの絶対時間

【Nコード】

N2274M

【作者名】

@トレード

【あらすじ】

ここは、科学の街学園都市。とある街にとある少年は存在していた。うざい情報屋、喧嘩が強い超能力者、魔術側からのスパイ、そして最強の能力の持ち主さらに世界最大の原石と言う変わり物達が集まる街。

世界と学園都市が交差する時全ての物語が始まる。

序章

ここは科学の街学園都市　この街は東京都の三分の一もある街

学生がほとんどのこの街は超能力がつかえる
よようになる街とよばれ世界の学生のおこがれの場所と言っても過言
ではないがこの街もしょせんランクをつけられているのだ　無能力
者　　低能力者　　強能力者

大能力者

超能力者

とランクづけられてる無能力者は絶望し超能力者が得するそん
な街だった。　　そしてこの物語の主人公神矢真この少年も
無能力だった　しかしこの少年はある能力の持ち主だった

序章（後書き）

はじめての投稿となります

第1話(前書き)

第1話ですごくぞ

第1話

夜道を駆け抜けるしょうねんがいた

「はあはあ、なんでこんなことに」

そうつぶやいた少年神矢真かれはいま不良に追いかけてられるかれがこうなったのは理由がある30分前のことだった真は外食をしようとして夜道を歩いていたそのとき不良にからまれてる女の子発見自分はそうことは許せないたちなのでたすけにいった

「おいそこのバカどもその子こまってんじゃねーかよってたかって女の子おいまわしてんじゃねーよ!」

と真はどなってしまった当然不良も

「ああなにさまだてめえ」

ときれそれがむかつきさらに挑発し不良が追いかけるそして真が逃げるでいまにいったという訳だ

「くっそ」思わずそう叫んでしまう裏路地からぬけなんとか巻いたなどおもったがまだ数人走ってくる

「またマラソンのほじまりかよ」

そうさけんでしまうほんとうだったらいまごろハンバーグでもたべたのにそこで真は気づいた不良が追ってこないだれかせいぎのヒールでもきてふりょうを倒してこれたのかとおもったとき

「へへ追いついたぜ」

とふりょうが真の前にいた

「おいおい冗談だろ」

とつぶやいたとき真のまえにいつのまにかしょうじょがたっていた
そしてこう言う

「ジャツジメントですの」

（だれだ？）

と真は思ったとき少女が

「わたくしは白井黒子と申しますここからはわたくしにおまかせく
ださいまし」といって不良のほうへいつてしまった

（大丈夫か）

と心配してしまった

「ジャツジメントですのあなたたちを拘束します」

そう白井がいったとたん

「ぶはははははは」

不良たちはわらいだしたそして不良の1人が白井にむかって

「お嬢ちゃん大人の世界にくびつつこむとこうなるぜ！」

といい白井に拳を放ったしかし白井はそれをかるく避け不良の腹に
蹴りをいれた

「ぐはあ」

「あなたたちもまだ子供ではありませんの」

「くっそおれの能力は氷使い（アイスマスター）だからえ」

そういったとたん氷の塊をなげつけたが

「なにきえたまさか」

こおりを投げた瞬間白井が消え不良のめのまえにいた

「おそいですわよ」

不良を白井が蹴りとばした

「さてとあとはあなた一人ですわ」

「ふんやれるもんならやってみな」

そういつた瞬間白井足元が崩れた

「なんですの」

さらにコンクリートを操りしらいを上空に飛ばすと石の塊白井のわき腹にあてた白井うずくまり地上に落ちた

「そんなものか」

「嬢ちゃんもういいぜさがってな」

そう白井に言ったのは真だったそして小さな声で言った

「絶対時間スタート」
エンペラータイム

といったとたん真の眼の色が紅となった

「いくぜ」

すごい速度で不良につっこんだ

「くそ」

「あまいぜ」石の壁をつくった不良しかしおかまいなしに石の壁を破壊しそのまま不良の顔面に拳をふりおとした不良はふっとんだそして白井も驚いていた

「あなたなにものですの」

「俺はレベル0だ」

といいそのばをあとにしたぜんぜん平和じゃない一日だったと本人は思った

第1話（後書き）

次回いろんなキャラだします。

第2話（前書き）

オリキャラだしました

第2話

ピンポン

「ふあゝあさつぱらからだれだよはいはい」

「あれあずねえゝじゃんどしたの？」

「どうしたもこうしたもありませんはやく学校にいきますよ」「といったのが隣人の中野梓

「はあだつてまだ7時だぜ」

「時計壊れてませんか？」

「ははっそんな訳あつた」

テレビをつけた真は顔まっさおにし身じたくをはじめたまたまたさわがしい1日のはじまりかと真は思った

数分後なんとか学校についた真だつたがいきなりうしろから

「女の子と登校できるなんて羨ましいにもほどがあるやで真ちゃん」

「驚かすなよ青ピ」

「略するなああちゃんと青髪ピアスとよぶんや」とどなったのは身長180cmの怪物男だつた

「まあまあよびやすいならいいぜよ」と言つたのは金髪にサングラスの不良少年土御門元春だ

「っーかそんなのはどうでもいいけどお前の義妹が校門でまつてたぞ」と冷静に言つたのが不幸の塊上条当麻

「ん、なんでだにやゝ」

「なんか弁当とかいってたぞ」

「あ」と言いいそいでいってしまった

「おゝす青髪ロリなメイドの画像とつたぞ」といったのはロリコンでレベル4の能力者黒桜春だ

「ほんまかほなボクの携帯に送つてなゝ」

そのとき学校のチャイムがなった

なんとか授業を終え昼休みとなつていたグループになり弁当を食っ

ていたちなみにグループとは青髪、土御門、上条、黒桜、真の5人だ
「さて、今日は家にメイドがいたらどうする？と云う話をしようじ
やないか」ときりだしたのは黒桜だ
「やっぱメイドでもロリが最強だにゃ」
「一理あり」
「なんでもかんでもロリですませるなよ」
「そうや、あボクは膝枕で耳かきしてほしいんや」
「そんな非現実てきな考えはやめようぜいやっぱロリが無敵だぜよ」
「うるせいロリコンどもおおお！！」とこんな話を楽しく昼休み
をすごしました

放課後

学園都市内では珍しい軽音部にむかった

「ちーす」

「またきたのか」といったのが律

「こんにちは」とマイペースにいったのが紬

「真ちゃんお茶しよ」といったのが唯

「そうだな」とシンプルにいったのが漣

そして梓この5人が軽音部メンバーである

「なあ漣」

「なに」

「お前のファンクラブすごいことになってるな」

「ぶーげほげほそのことはわすれたかったのに」

「でもうちのクラスでも3人くらいはいつてるぜとくに青髪ってや

つはすごいぜ」

「青髪君か」

「あり知り合い」

「ああちよつとしたね」

「ふーん」

(しかし平和だな)

本人はこういう平和がつづけばいいなて思っていた

第2話（後書き）

次回はたぶん戦闘はいるとおもいます

第3話（前書き）

SS2で登場するオッレルスをだしました

第3話

今日は土曜日休日だ今日昼まで寝るつもりだったが

「ふあゝ起きちゃった」

時刻は8時飯食って身支度したらもう9時半になっていた

「暇だ」

しょうがないから梓に電話することにした
プルルルル

「でないしゃーねえ」

梓の家に行くことにした

ピンポーン

ガチャ

「はい」

「おつすあずねえ暇ならいつしよにどっかいかない？」

「いいけどちよつとまって準備するから」

「おーす」

梓とは昔から二人でいろんな所にいつてるから珍しくはないのだ

「おまたせでも真から誘ってくるなんてめずらしいね」

「そーか？それよりどこいく」

「服ほしいんだよね」

「そっかじゃーセブンスミストいこーぜ」

20分後

「すごいさすがセブミスいろいろある！」

「そんなにつれしいのか？なんなら欲しいやつ買ってやるよ」
「え、でも」

「いいよいよ俺から誘ったんだしぜんぶおれのおごりでさ」

「じゃ欲しいのあったらね」

「ああ遠慮すんなよ」

「あずねえこんなのどうだ」

「いいですね着てみようかな」

「おうためせためせ」

3分後

「どっ」

「お、おお」

（かわええ）

「おうってどっちなのよ」

「え、もちろんかわいいよ」

「ありがとう」

ちよつと顔を赤くしていつてるところが最高だった
かれこれ2時間程遊んで梓と分かれた

「いや〜おもしろかったなん、人がいないような」

「よく気づいたねまあてつとりばやくおわらせたいんだけど」

「あなたなものだ」

「ぼくの名前はオツレルスちなみにいま人がいないのは人ばらいのルーンをはってるからさ」

「で、あなたの目的は？」

「原石である君を倒しにきたと言うところかな」

「ようは戦えばいいのか？」

「そのとおりよみこみがはやくてよかったはやくおわらしたいんだ」

「ちっわかったいくぜ」

真はいつきにふみだしオツレルス拳を放った片手でうけとめられたがその瞬間真はオツレルスの背後にまわった

「おそいぜ」

ドガン！！

オツレルスの背中を蹴りとばした

「ぐは」

「そんなものかよ」

「くつやるなら僕の力をみせてやろう」

そういつた瞬間真のからだがか吹っ飛んだ

「がは」

(いったいなにが!?)

「ふ、わからなくてとうぜんだろうな」

「くっそがはあはあ」

「まだたちあがるかおとなしく寝てればいいものが」

「うるせえええ!!」

真はオツレリスに拳をはなつたがやはり真が吹っ飛ぶ

「きみとぼくではちからの差がありすぎるんだよ」

(くそつたれが)

真は気を失った

「ま、これだけ軽く原石をひねっておけば大丈夫だろう」といいオツレルスは姿を消した

つづく

第3話（後書き）

次回はキャラ紹介やと思います

オリキャラ紹介(前書き)

キャラ紹介ですけいおん部の皆さんも紹介してますちょっとだけ

オリキャラ紹介

キャラ名

神矢真

能力

エンペラータイム

絶対時間

説明

身長172cmの少年レベルは普段0だが絶対時間発動時だけバンクに登録しているすべての能力を使えるようになるちなみに使用できる時間は15分

名前

黒桜春

能力

マスタースパーク

電撃波動

説明

身長

175cmの少年能力値はレベル4ロリコンでよく青髪や土御門と話すしかし学園都市では優秀なほうでがんばればレベル5になれるかもとも言われている

けいおん部メンバー

田井中律

けいおん部部長ちなみにレベル2

秋山澪

ベースをやってるレベル3

平沢唯

ギターやってるレベル2

琴吹紬

キーボードやってるレベル3

中野梓

ギターやってるレベル3

オリキャラ紹介（後書き）

字数が少なくてすみませんでした
次回は戦闘はあります

第4話（前書き）

魔術編スタートです

第4話

「うづくそいったいなにが」

「おおきがついたかよかったよかった」

「春!？何でお前が？」

「いやーたまたま倒れてるお前みつくてたすけてやったんだよ」

「まじかよ」

「あ、きがついたんですね」

不意にだい3者から話をかけられた

「ん、あ君は！」

そうその子は2日くらいまえに不良から助けた女の子だった

「探してましたあのときはありがとうございました」

「あ、いや別に当然のことしただけだから」

「私佐天涙子っていいいます」

「俺は神矢真だよろしく」

「そういえばあのあときいたんですけど不良のボスを倒したんですよ」

「ぐ、なぜそのことを」

「白井さんからきいたんですそれにしてもボスをたおすなんてすごい能力者なんですよね？」

「いや、レベルのだけど」

「そうだと涙子こいつ本当にレベル0なんだぜ」

「てかさ春何でお前が女の子を名前だよぶところまでいったいいつフラグたった!!」

「えっと3時間くらいまえかな？」

「はぁーいったいなにがあったんだよ」

「いやーいろいろあってさなー涙子」

「あ、うん、そだね」

「あーそーですかじゃ俺帰るは」

「あの大丈夫ですか体」

「あー大丈夫大丈夫」

とは言つたものの本当はけつこつ体中痛かつた

(くそ結構いてえ)

なんとか寮の近くの駐車場にきてたそのとき後ろから話

「そのきみ」

と話かけられたのでふりむくと赤い髪の毛のいかにも怪しい男がたつたそのおとこは写真をみせこつこついう

「こつ顔の人みなかつたかな？」

「いんや」

「そつか、じゃ第2の目的を達成したいんだけど」

「なんだ」

「君を消すことさ」

そつ言つた瞬間おとこの手に炎が集まつたそして

「巨人に苦痛の送りものをおお!!」
ドガン

「ふそんなものじゃないはずだ原石よ」

「あんたは能力者か？」

「いんや僕は魔術士だ」

「魔術だと？」

「そうさ、ちなみさつききみと戦った男やつは魔神と呼ばれるまぎれもない魔術さ」

「そうか」

(たしかにあんな能力みたことなかった)

「ふんどちらにせよいまから消える相手になに言っても無駄か」

「ほざけ消えるのはおめえーのほうだ」

「わが炎の剣よ四方八方にとび標的の体を刺し殺せ」
と男が言った瞬間剣が四方八方からとんできた

「ちつめんどくせ」

と真はいいアクセラレータの反射すべてふつとばした

「なに」

「お前弱いな」

「くそ塵は塵に」

とおとこがいいかけたときに真はおとこのまえにいた

「おせーよ」

バキ

おとこの顔面を真が殴り男はきぜつしていた

(しかし原石でいつたいなんのことだ？まあいいやジャツジメント
がくるまえにづらから)

このとき真はまだ大きな戦いになるとは思っていなかった

第4話（後書き）

次回は春と佐天さんの出会いを書きます
コメントよろしくお願ひします

第4話外伝（前書き）

どうぞ

第4話外伝

ピピピ

「ふあゝまだ眠いな」

今すぐく眠そうにしてる少年彼の名は黒桜春

「とくに予定とかないけどフラグでもたてるために街でも巡回しますか」

こうして彼は街にいったでもここで彼の人生を左右する出会いがあるとはまだ知らない

午前9時30分巡回スタート

「ふー街といつても人がいっぱいいるだけか」とかいいながら彼2時間歩き続けたそこで

「お、女の子が不良に襲われてるしかも結構かわいい」
春は決心した

「よし助けよう」

「おいその不良どもなによつてたかつて女の子追い回してんだこの変態が」

「はあゝうるせえ外野だな」

ブチ

「ちつめんどくせだったらとつと消えるよゴミクスが」
春はそう言つと不良みぞけつとばした

「ぐは」

「てめえなにもんだ」

「とおりすがり王子様だ嬢ちゃん耳ふさぎな」

「いくぜコラ」

そういつた瞬間不良と不良の間に線がとおりその瞬間後ろの方で大爆発がおこったおそろのおそろ不良が後ろをむくと地面がえぐれてた

「うわー」

ときけびどっかに走っていった

「ふー不良なんてこんなもんか」

「あのー助けてくれてありがとうございますすごします私佐天涙子ていいます」

「俺は黒桜春だ」

「あのーせめてものお礼になんかさせてください」

「んじゃ飯食いにいこうぜ」

そついい二人は飯屋にいった

「好きなの食べてください」

「ああ」

30分後食い終わった

「あーうまかったな」

「そうですね」

「春さんレベル高いんですね？」

「ああレベル4だ」

「やっぱり」

「ふ、俺はレベル0でも不良に立ち向かってたぜ」

「でも」

「レベルがどうしたそれにもう俺たち友達じゃねーかおまえを傷つける連中から佐天さんを守ってやる」

（きまった）

「ありがとうございますあと私のこと涙子ってってください」

「でもさっきあつたばかりで」

「時間なんて関係ありません」

「分かったよ涙子」

「さて次どこいく」

「アクセサリーショップいきたいです」
そしてアクセサリーショップにいった

「ん」

佐天が髪飾りを物欲しそうにみてた

「それ欲しいならかってやるよ」

「ほんとですか」

「ああ」

佐天に髪飾りを買ってやった

「付けてみてくれよ」

「うん」

「おおかわいい」

佐天さんは顔赤くし上目使いでいった

「ありがとうございます」

そのとき近くでギャーギャーいつてた

「ん、なんだ」

野次馬ぎみにいつてみたがそこには

「な、真じゃねーか」

そこには彼の友達神矢真が倒れていたそのことを佐天に言った

佐天が

「大変じゃないですか私の部屋に連れていきましょーう」

「ああでもどうしてあんたにとっちや他人だろ」

「他人じゃないですこの人まえ私のこと助けてくれたんです
それにあなたの友達私の友達です」
そ

「涙子」

こうして佐天の部屋に真をねかしたその後真は目を覚ました

第4話外伝（後書き）

感想まっています

第5話(前書き)

じいじ

第5話

ピピピ

バン

「ふあゝ今日からまた学校か。」

彼は昨日魔術士とやらと戦い疲れがたまっているのだ

ガララ

なんとか学校に着いた真ドアをあけた瞬間話かけられた

「おーす真昨日は帰れたか」

「ああ、なんとかかな」

黒板の方ではなしをしてた三馬鹿もこっちにきた

「なー春やん聞いてくれよ上やんがいえにメイドがいたらなにさせるって聞いたら掃除させるっていったんやで夢のない男やと思わんか」

「大丈夫だ、おそらく上やんは強がってるだけであって実際いたら鼻血だしてぶつたおれるから」

「おまえらは俺がそんな変態に見えますかー」

「「「「見える!!!」」」」

4人揃って言った

「いや上やん彼女いない歴イコール変態だにや〜」

「じゃーおまえらもだろ」

「さてそれはどうかな。もし俺等全員が彼女もちだったらどうするんだにや〜」

「え？」

「つて嘘だよ本気にしたかニヤ〜がはははは」

「はいホームルームを始めるので座ってください〜い
真のクラスの担任小萌先生がいった

放課後

「なんとか耐えきった〜」

「おい真一緒に帰ろうぜ」

「ああ、いいけど」

「なー真ジャツジメント一七七支部によりたいんだけど」

「いいけどあそこ一般入っていいの？」

「ああ、涙子がそうだった」

「そうか、て言うか佐天さんにあうためにいくのかよ」

「悪いかよ」

30分後

「ここか」

ガチャ

「おじゃまします」

「君等だれ」

「えつと俺は黒桜春でこつちが神矢真といいます」

「ジャツジメントじゃないよね？」

「あ、はい」

「ということは不法進入だ咬み殺す」といい男はトンファーを構えた

「ちょ、誤解してますよ」
そう春がいった瞬間トンファーが降りあげられさらに連続攻撃を放ってくる

「あぶね、つーか誤解だって」

「すばっしこいね」

「あのもしもし聞いてますか」
ブン

「がは」

ドガーン

男のトンファーが春の顔面にあたり春はふっとんだ

「春!!!」

「大丈夫だ、この野郎顔面殴りやがっておかえした」

春は回し蹴りをしたが交わされたしかし彼はアッパーを続けてはなつた。男はもろ顎直撃し吹っ飛んだ

「どうしたそんなもんかよ」

「咬み殺す」

素晴らしい春の懐にとびこみトンファーを放った。何とか避けたはずだったしかしなにかに当たり春はしりもちをついた

「終わりだよ」

「そこまでー!!!」

春と真が振り向くとそこにはジャツジメントが多数いた

その後説教をうけ佐天さん含め三人でトボトボ帰るはめとなった。

その後トンファー使いの男の名は雲雀恭弥と言うことを知った。

第5話（後書き）

雲雀さんだしましたというか真がぜんぜんしゃべってません。

感想まっています

第6話(前書き)

ジュン

第6話

「はあ〜寝れねえ〜」

真は一人でつぶやいていた

「こういうときは散歩でもするか」

（まったく我ながら親父くさいぜ）

とか思いつつも寝れないのでさんぽに行くことにした

「星はきれいなのにどうして世界はくされてるんだろっな」

この天下の街学園都市でも不良と言う名のバカは消えたりはしない

「まったくどうなってんだか」

そう言い僚に戻ろうとした時最近よくある異変が起きた

「またかよ最近よくあるよ。おい魔術士さんよでてこいよいるんだ
ろ」

「よく分かりましたね」

（女？）

「ふん、三回同じことさねりゃ気づくっつーの」

「私の名前は神裂火織です。少年に質問します禁書目録と黒書目録
というのを聞いたことがありますか？」

「いいや」

「そうですか」

「また、戦うことになるのか？」

「いまはわかりません」

「そうか」

「でもいずれ戦うかもしれません」

「おいあんた俺からも質問していいか？」

「なんです」

「原石ってなんだ？」

「簡単なことです理論上かいめいでないもののことを原石と言ってるだけです」

「じゃーもうひとつなんであんたらは禁書目録とやらおってるんだ？」

「記憶を消すためです」

「なっ、なんでそんなことするんだー!!」

「そう言うと思いましたよ会う人はみんな私たちのこと悪者だとおもうとっせんですよ」

「そんな」

「あなたも邪魔をするなら容赦しません」
そう言ったとたん神裂から殺気がはなたれた

「ちっ」

やるしかないと思ったとき

「神裂そこまでだ時間だよ」

「あんたは！」

「ふっ申し遅れたね僕の名はステイル＝マグヌスだ」
そう言い残し二人は消えた

「なんだっ たんだよ」

彼はこれから大きな戦いに巻き込まれるとは知らなかった

つづく

第6話（後書き）

今回は戦いの前の静けさという感覚で書いたんで字数少ないです

次回から禁書目録編にはいれると思います

第7話（前書き）

じいぢ

第7話

真は今学校にいる。今日は学校が終わり夏休み前の最後の学校の日だ。

「はい今日の授業ここまで明日から有意義な夏休みにして下さいね」

と小萌せんせいはいい教室からでていった。

「しかしもう夏休みかはやいな」

「そっやね」

「春いつしよに帰ろうぜ」

「すまん、用事がある」

「ほな、僕たちもかえりますわー。おおきに」

「俺一人かよ。」

「ねー真」

「なんだよあずねえ」

「一緒に帰らない？」

「ん、いいけど部活は？」

「今日はない」

「そうか、じゃいこーぜ」

「いやーしかし、疲れたなー」

「そう言えば、けいおん部のみんなが合宿するっていったんだけど真も誘えーって言われたんだけどいける？」

「なんで、俺が？けいおん部と関係ないけどいいのか？」

「いいんだよ、みんなきてって言ってたから」

「じゃーいいかな」

「それじゃーみんなに言っとくね」

「おお」

「あと予定たてるときは呼ぶかもしれないから」

「分かった」

「あと、真花火見にいかない」

「それも、けいおん部でか？」

「いや、・・・ふ、ふたりで」

「いいぜ、別に」

「い、いいの！？ことわられると思った」

「断る理由なんてなくね」

「じゃ、約束ね」

「おうよ」

梓とゆびきりをした。梓は顔赤くなったのだがあえてツツコマなかつた。

そのままいえまでするかとかなに持ってけばいいのかの話をしてた。

(ふっ、いい夏休みなりそうだな)

と思った真しかし新たな物語が始まるうとしていることを彼しらない

第7話（後書き）

文字数少なくてすみません
次回おそらく戦闘はあります

第8話（前書き）

じいじ

第8話

「あっちー」

今、真は部屋にいた。夏休みにはいり2日間疲れを癒すために寝つづけたのだがさすがに3日目は寝れず部屋でうろたえていた

「どうしよう、家にいても暇だしなー」

こんな日は家でゴロゴロといきたいのだが残念なことにクーラーが壊れてしまったのだ

「だーこういうときはネットカフェにでもいってゴロゴロしてやるやつあたりぎみそう言った真だったが動く気配0だ

「とりあえず外でるか家にいるよりまじだろ」

そう言っただけ起きあがったものの寝すぎで頭が重い

「頭いって〜」

なんとか外にでた真しかし外も猛烈に暑かった

「なにこの暑さ、灼熱火炎地獄ですか」

と言い歩きだしたが3分でアウト

「あっつーあっつー」

と呪文を唱えるように言う真

(とりあえず涼めるところを探そう。考えるのはそれからだ)
と思えば歩きだした時、真は近くの公園で日陰を見つけた

(とりあえず、あそこで休むぞ)

走っていき日陰のベンチをとろうとしたとき、カップルらしき二人がベンチ座った

(なにー、俺が先にみつけたのに。ん、あれ唯じゃねーか?)
唯とはけいおん部でギター&ボーカルをやってる真より1つ年上の少女のことである

(あの野郎、ん、なんであいつ男といるんだ?まさか)
あのバカで天然の少女に彼氏ができたとても

(はは、ないない考えすぎだ俺)
と思った時横から話をかけられた

「おう真、元気がー」

「わぁー声だすなばか律」

「なんでだよ?」
と言ってきたので、唯がいる方を指さした

「げ、まじかよ」

「わかつただろ、もう声をだすなよ」

「おもしろそうだな、あたしもまぜてー」

「いいから、声だすな」
唯達が、動きだした

「お、動いたぞ」

「よし俺らも動くぞ」

唯達がいっただのはファーストフード店だった

「おい律、絶対バレるだろこれ」

今、真達が座ってる席は唯達の座っている席の2こ後ろだ

「へへ、大丈夫大丈夫」

「お前の大丈夫はあてにならん」

唯とその少年は仲良くしゃべっていた

「ふーむ、しかし不思議だ唯に彼氏ができるなんて」

「おそらく、唯の天然さにひかれたとか」

「ありえなくもないな」

とか話てるうちに唯たちが動きだした

「よし、律いくぞ」

「ラジャー」

次に唯たちがいっただのはゲーセンだった

「ゲーセンか、デートにしては珍しいなー」

「たしかに」

しかし唯達はプリクラ機のなかに入っただけ

「なるほどね、プリクラをとるために、それならよくあるな」

「……………」

「おーい、律どうしたー」

「ん、ああそつだな最近の女子高生はよくやるよなー」

「ああ、たしかに」

そして、唯達がゲーセンからでたときに

「うお、手繋いでるぜ」

「ぐへーまじかよ」

そして移動し、唯の僚まできてた

「そろそろ、お帰りかな」

といった時に少年と真の目があつた

「やっべ」

といい逃げようと思ったときに

「あれ？真ちゃんにりっちゃんこんなところだなにしてるの？」
唯にばれた

「いや、あははは」

この空気はどうしてくれるんだと言わんばかりの目で少年はこっち
を見ていた

「ほんとうにすいませんでした」

「いやいや、いいですよそんなに謝らなくても」

「え、許してくれるの?」

「ええ、もちろんです。唯の友達なんでしょうし」

「はい、けいおん部部長の田井中律です」

「おれは神矢真」

「ぼくは、泉劉夜よろしく」

泉劉夜となのつた男は身長は真と同じくらいで顔が整っている少年だった

「ああ、もうこんな時間、僕は帰りますね。さよなら、唯、律さん、真君」

「俺も帰るは」

「じゃーな」

「またねー」

真は大きな橋のうえにいた

(はー疲れた)

そう思ったときに後ろから足音が聞こえた真は振り向いたそこには

つづく

第8話（後書き）

戦闘をいれようとおもったのですがながくなりそうなのでやめました
次回いれようと思います

第9話（前書き）

じいじ

第9話

コツコツ

後ろから足音が聞こえる。真は足音が聞こえる方へ振り返った。

「てめえは」

そこにはポニーテールで長身の女が立っていた

「久しぶりですね、神矢真」

「なんのようだ」

明らかに前会った時とは殺気がちがう怖いくらいだ

「あなたに、協力をもとめにきたのです」

「協力？」

以外な言葉が神裂のくちからでてきた

「ええ、ある目的を達成したいのです。その目的が達成されたのなら・・・」

「達成できたらどうなるんだ？」

「禁書目録を救えます」

そう言い顔をしかめた神裂

「協力するのか、しないのか決めてください」

「条件しだいだ、もし、俺があんたに協力するとして俺を使いなに

させるか言え」「そうですね、あなたにやらせることといたら、上条当麻と戦わせることです」

と神裂の口から予想してなかった言葉がでた

「は？何言つてやがる上条は関係ないだろうが」

「いいえ、彼はこの事件の中心人物ですよ」

「だったら、あんたがたおせばいいだろ」

しかし神裂冷たく言い放った

「たしかに、そうしたいのですが、原石であるあなたが倒さなければ意味がないと言われましてね」

「また、原石かよ」

「協力するのですか？それともしないのですか？」

「ああ、そうだな」

と言い真は神裂を睨みつけこう言った

「お断りだ、くそボケ」

「そうですね、力づくでも協力して貰います」

七閃

そう言った時には地面がえぐれていた

(なんつう速度だよありえないだろ)

「もう一度いいいます私たちの」

と言いかけたときに

「ゴチャゴチャうるせーよとっとかかってきやがれよ」
七閃

「終わりましたか」
神裂が立ち去ろうとしたとき

「ふんなるほどねーワイヤーを使っていたのか」

神裂はおどろいていた殺す気で撃つたのを無傷で受け止めたからだ

「でも、ワイヤーご

ときじゃ俺にダメージを追わせるのはおるか、体にもさわれねーぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「これで、分かっただろ、あんた本気でやんな」

「分かりましたでは」

と言い神裂を日本刀を鞘から抜いた

「唯閃を使用します」

と神裂が言った瞬間一気に距離をつめてきたそして真に斬りかかった

「あまいぜ」

今、真はベクトル操作を使っている普通の人間なら触っただけで骨が折れるしかし、神裂は異変に気づき刀を一度引き真から距離をとった

「なにをしたのかは分かりませんが、さすが原石ですね。一筋縄では行きませんせんか」

と言い神裂は距離をつめ斬りかかるふりをし七閃を使用したしかも

地面を狙ってだ

「何!!！」

真は宙に浮いた

「貰いました」

と言った時には真の背後に神裂がいて斬りかかろうとしていた

「くっそ！」

と言った瞬間真が爆発し神裂を巻き込み吹っ飛んだ

「ぐ・・・あ」

「くっ 一体何が」

「はあはあ、簡単な話さ、あんたが斬りかかる前に爆発使いの能力を使ったただけだ」

しかし神裂はまだ倒れてない

(やべーぜ、時間がない速攻だ!!！)

真はエネルギーで作った剣で神裂に斬りかかった。しかし神裂は刀で防いださらに連続で斬撃を放った

「く、やりますねしかし」

神裂はほとんどゼロ距離で七閃を放った真は耐えれずノーバウンドで吹っ飛んでいった

「ぐはああああ」

体中から激痛が走ったしかし彼はたった

「くっそがあああ!!」

そう叫び真は神裂のもとへつつこんでいった

「うおおおおおお!!」

ほとんど互角の戦いだったそして勝ったのは

「はああ、やったぜ上条、みんな」

と真が言うとその場に倒れた

その5分後にステイルがきた

「これは、また派手にやったね」

そして真のほうを見てこう言った

「まったく、神裂を相打ちに持ち込むなんて未恐ろしい子供だよ」

ステイルは炎をてにまとわせこう言った

「ここで、殺しておこう」

と言った時に声がした

「その君、この街の生徒をきづつけたね？咬み殺す」

また新たな戦いが始まるうとしていた

第9話（後書き）

感想まっけてます

第9話外伝（前書き）

どうぞ

第9話外伝

「ふあゝ眠いな」

と大きなあくびをして夜道を歩いていた雲雀恭弥。彼は今大きな橋に通りがかかっていた、しかし、彼が目にしたものは

「なんだこれ」

橋の表面がえぐれてたり壊れていたりした。そして、橋の奥の方には、倒れている少年と赤髪の長身の男が立っていた

（あれは、たしか、神矢真だっけ。でも、あの赤いのはみたことないな）

赤い髪の男スタイルは今まさに真に炎を投げようとしていた

「その君、この街の生徒をきずつけたね？咬み殺す」

そう雲雀は言うとしてスタイルは涼しい表情で言った

「僕にも予定があるんだ、邪魔しないでくれるかな」

「ふーん、じゃ僕がその予定ごと咬み殺してあげるよ」

と雲雀も冷静に言った。スタイルは少しめんどくさそうに言った

「しかたない、この状況も見ちゃったしね、最後に言うけど始めてから後悔するなよ」

そう言うと二人は距離をとった。スタイルと雲雀の戦いが始まった。まず、雲雀がスタイルとの距離を縮めようと駆けだした。しかし、スタイルの手にはすでに炎が集まっていた

「巨人に苦痛の贈り物をおおお!!」

と言い雲雀に炎を放った。しかし

「そんなものかい」

炎の中からは無傷の雲雀がでてきた。さらに、ステイルの懐に飛び込みトンファーをステイルの顔面めがけて放った

「くっ」

ステイルはぎりぎりのところで攻撃を避け雲雀から距離をとった

「どうしたんだい、まさかさっきので本気？咬み殺しがいがないね」
ステイルはきれ、真との戦いのときに使った技を使用したそしてステイルは静かに言った

「刺し殺せ」

その瞬間空中にあつた炎の剣が雲雀のほうに迫ってきた。雲雀はトンファーに内装されてる仕込み玉鎖をとりだし振り回した

「すべて、打ち落とせば問題ないね」

と言い玉鎖を炎剣にあてただが、雲雀は異変に気づきトンファーに目をやったなんと玉鎖が溶けていたのだ

「あれ、言つてなかったけ？僕の炎は3000度もするんだ鉄ごとき普通に溶かすことができるよ」

ならと雲雀は走り出した、防御がダメなら避けるしかないと思ったからだ雲雀は炎剣を避けつつステイルに近づいていった。しかし、炎剣一本がちかづいてきた雲雀はトンファーで防いだ

「たしかに、すべては避けられないだろう。だから、僕はこの一本だけあたると決めていたんだ」

と言つてるうちに雲雀はステイルの顔面をとらえていたステイルは

後ろに吹っ飛んだだがステイルは倒れなかった

(くそ、時間がないならやられっぱなしでいやだけど一度退くか)

その瞬間ステイルは炎を投げた雲雀は避けたがステイルは消えていた

「逃げれたね、次あったら咬み殺す」

雲雀は真を持ちその場から立ち去った

第9話外伝（後書き）

更新遅れてすいませんでした次回はまだわかりませんが戦闘ははいらないと思います

第10話(前書き)

ジュン

第10話

真は今ジャッジメント一七七支部にいた

「まさか、あんたに助けられるとはな」

真は何時間か前に魔術師と戦い気を失いそこを雲雀に助けられたのである

「さて何があつたのか教えてもらおうか」
しかし、真は言う気はなかった

「あんたに、言うことなんてねーよ」

と返したしかし、それは理由があるからだ。自分を助けてくれた奴をこの魔術師などの戦いに巻き込みたくないからだ

「ふーんなら、嫌でも吐かせるまでだよ」

しかし、真はこう返した

「ぬかせ、あんたじゃ俺には勝てねーよ」

その瞬間雲雀はトンファーを真の顔面めがけて放ったしかし真はなにも動作をしなかったが雲雀は吹っ飛んでいった

「ワオ、面白いね君」と言った瞬間に雲雀は真の懐に突っ込んで真を殴ろうとしたそこで、

「やめてくださーい!!!」

と誰かが叫んだ、真は振り向いたらそこには頭に花をつけてる少女がいた

「よそみしている暇があるのかな？」

と雲雀は言い殴るうとしていたが、真は運動量のベクトルをかえ座ったまま蹴りを放った雲雀は避けようとしたが腹に直撃し吹っ飛んでいった

「助けてもらってわりーけどやっぱあんたに話すことはねーよ」

と言ったが雲雀の耳には届いてないだろうなせなら雲雀は気絶しているからだ

「あのーそこのお花さんこれって公務執行妨害で拘束とかされるんじゃないか」

と真は汗をダラダラ流しながら言った

「いえ、また雲雀さんから襲ってきたのでしょうから、それより私の名前お花ちゃんではなく初春飾利です」

「あー俺は神矢真だ」

といちおう礼儀なのでこちらま名前を名のった。真は時間を調べるために携帯を開いたけっこうメールがきていたので見たらけいおん部みんなから一人一件ずつメールがきていた。内容は合宿の計画をたてるから、唯の家に来いと言うメールだった。

「じゃー俺は用事があるからこれで」

「あ、はいお気をつけて」

真はジャツジメントの支部を出た瞬間走り出した

30分後ようやく唯の寮についたドアを開け寮にはいった

「すまん、遅れた」

「遅いよー真ちゃん」

と言いながらものんびりケーキを食ってる唯

「まあ、でも真君にもいろいろ事情があったんだよ」と冷静に言った劉夜

「あーはい、いろいろありましてね」

ちなみに劉夜も合宿に行くことになってる

「とりあえずみんな揃ったから始めるぞ」

と言って漣が合宿のメニューを考えはじめた

「て言うか漣これメニュー考える意味あるか」と言った真

「あるにきまつてるだろ」

そう、当然なこと聞くなという感じでいった

「でもさ、計画たてても唯や律がそのとおりやるとは考えられないんだよ」

うっ、と漣は言ったなぜなら真はそうとう根拠のあることを言ったと感じたからだ

「たしかに・・・」

「うおい、漣納得するな私たちはやる時はやるんだ」と言った律

「じゃーこれ合宿のメニューだ」

漣は計画をたてられてる紙を見て律は顔色をかえた

「これは、さすがに」

漣はやっぱりかと言っ感じため息をついた

「計画決まらないなら先買い物いこーぜ」

と真は言ったそしたら、律、唯、細が賛成と言ったそして漣も

「このまま考えても案浮かばないし行くか」

と漣が言っつと続けて梓、劉夜も賛成と言っつことできいくことになった。
しかし彼らはとある事件に巻き込まれることになる

第10話（後書き）

次回戦闘はありますあとコメントくださいよろしく願います

第11話(前書き)

今回は短いです

第11話

真は唯達けいおん部で買い物に出かけていた大体皆ほしものがあるところに行き別々の行動だった

「うーん特に欲しい物がないんだよな」

と言う真

ちなみに真と行動しているのが漣、唯、劉夜だ

「確かにもうほとんど準備しているから買うものがないね」

と劉夜は言ったが、もう準備してるなんてさすがだなと真は思った

「うーん」

と唯はうなっていた

「どした、唯」

と声をかけた真

「いやー、どの浮き輪がいいか迷って」

おいおいと真は思った

「お前、仮にも高校生だぞそれで浮き輪てお前」

と言ったが

「つつこむとこそそこじゃないでしょ」

と漣にかえされた

「買うものないし俺ほかの場所見に行くはー」

と言いいこーとしたときに目の前に青髪の男がいた。その男はこち

第11話(後書き)

更新遅れましたすみません

第12話(前書き)

じじい

第12話

青髪が衝撃の告白をせて1時間が経過していたこの時真は知らないがとある事件が起ころうとしていた。

「だいたい買い物はすんだしそろそろ帰るか。」

と真は梓、唯、劉夜に言ったちなみに漣は青髪とどこかに行き律と紬は二人で服を見に行った。

「ところで、劉ちゃんお腹すいたよー」

と言い唯がだれてる

「僕もお腹すきました」

「だったらここ出てほかの所で食べませんか」
と梓はそう言った

「よしじゃー皆集めて行くっぜ」

と真がいった時にアナウンスがなった。その内容は電気の障害があり営業を終了させてもらおうと言う事だった

「まじかよ。でもちようど帰ろうとしてたしな」

と真は言うが何かひっかかっていた

(いきなり営業終了?しかもジャツジメントもいやがる妙だな)
と真は考えていたのだがトラブルに巻き込まれたくないの店を出ることにした。

「真君行きましょう」

と劉夜が言ったのでいくことにした。その時真はみた不審な行動をしてる二人組を。どうやら、地下にある物置のような場所に続く道がある場所の扉を開けて行こうとしていたようだ。真は透視能力を使いそのまま見ていたが、あきらかに強盗だった。

「真君、早く行きましょう」

と劉夜が言うのでしかたなく

「悪い、先行っててくんね」

と言った

「分かりました」

と劉夜なんのためらいもなく言い唯達と先に行った。真は劉夜達が見えなくなるのを待つと地下に走り出した。

「間に合ってくれよ」

と言い真はさっきの二人組の所へ向かう

そのころ劉夜はふと疑問に思っていた

(真君のあんな表情始めてみた。焦っていたような気がしたのだが) と思いながら真に電話をかけた、しかしでなかった劉夜はまさかと思ひ走り出した

「劉ちゃんどこいくの」

と唯が言うので

「真君を探してくる」

と言いままた走り出した

そのころ真は強盗らしき二人の目の前にいた
二人は店長らしき人を縛り上げていた

「あんたら、強盗なのか？」
と真は聞いた

「ふふふふはははは」
一人が笑い始めた

「もうけっこう前のはなしだからな覚えてるはずがねーか」
と言うがなのを言ってるかわからなかった

「あんた、なに言ってるんだ」
と真は返した

「ほんとに覚えてねーのか試作品が」
まさかと真は思いたため息をついた

「まさか、俺を研究所に戻すためにやったのか」
と真は男を睨み言った

「そのとおりだ」
と普通に返してきた

「ふざけやがって」
と怒りが爆発寸前の真が言う

「こちらにも時間がないのではじめるぞ」
と言い男は電撃を放ってきた

「あぶねー!!」

と言いなながらベクトル変化で反射した

「さすがだな、でも俺一人じゃないんだぜ!!」

と言った瞬間もう一人の男が風を放つ

「ちっ」

と言いギリギリ避けたがさらに雷を撃ってくる。実際不利な状況だ

「へっ、そんなものかよ」

と言い釘を投げてきたもちろん電撃の槍のように。真はそれをなんとか避けたしきもう一人に背後をとられた

(まずい)

そう思ったときには風を放つ準備をしていたその時その男が吹き飛んでいった

「真君、一人で無理しすぎだよ」

と言ったのが

「劉夜さん」

しかしどうやって吹き飛ばしたのかわからなかった

「くそー!!!」

と電気男が走ってきたが軽く腹にパンチをいれたら気絶した。

その後、強盗二人は拘束され真たちは唯たちと合流し帰った

続く

第12話(後書き)

次回合宿です

感想待ってまーす

第13話(前書き)

ジュン

第13話

今真は電車の中だ。

「しかし、遠いなー」

ここは学園都市からはるかにはなれた場所だった

「おー海見えてきたぞー」

律が叫んだ、いちおう旅行なので、テンションが上がるのが普通だが真はそんな気になれなかった。なぜかと言うと最近真のまわりで起こる事件などのせいもあるのだが、実は昨夜眠れなかったのだから真はいま猛烈に疲れてる訳だが

「どうしました？」

と劉夜が聞いてきたので

「寝不足です」

と返した

それから約30分経過しようやく目的地に到着した。そして目の前にはそうとうでかい家があった

（すげーなー）

と真は思い中に入ろうとした時に細がしんじられないことを口にした。

「ごめんねー今年は人数多いから一番大きなハウスを頼んでみただだめだったみたい」

まさかと思い真は聞いてみた

「まさか、ムギこれより大きな家があると」

そしたらうなずいた

信じらんねーとか思い家にはいった

数分後律と唯が水着に着替えて外に出ていった

「うらー」

と漣が怒鳴ったそしたら唯が

「遊びたーい」

と言ったので律もうなずいた。多数決をとり決めようとしたが劉夜、唯、律が遊ぶ組で漣、梓、真が練習組に分かれたので、ジャンケンになり練習組みが負けた

唯たちが楽しく海で遊んでいたころ真は日陰でねころんでた

「真君遊ばないの」

と梓が聞いてきたので

「少し寝たらいく」

と返したでも真はそうとうつかれていたここ最近自分の回りには事件がよくおこるのだ

（そういえば春と最近話してねーな）

と思い携帯をとりだし春に電話をかけたコールが四回くらいなりようやく春がでたそしたら春があせってる感じで

「今取り込み中だまた今度電話してくれ」
と言いつられた

（なんで焦ってんだまーいいか）

と思い携帯をしまい真も海にむかったらなぜか溼がぜっきょうしは
しっていた

数時間後

家え戻ることになったがもう夕方だ

「て言うか梓なんでそんなに日に焼けてんの」
と聞いたら小さい声で

「1番はしゃいでいたから」
と言い恥ずかしそうにしていた

時刻は午後7時50分律の提案できもだめしをすることになったペ
アをくんだが真が余りとなり最後に出発した

(早く終わらせて帰ろう)

と思い早足で歩いていたその時いきなりよこから火の玉が飛んでき
た真はそれを避け火が飛んできた方みたそこにわ真と同じ年齢くら
いの男がいた

「みーつけた」

とその男が言い放った

「てめーは」

真はその男を見たことがあった実験の時にいた男だった

「君のことを連れ戻しにきたんだ」
そついい手を差し出しただが真は

「断る」

と言い身構えた

「しょうがない。なら力づくで」と言い炎を投げてきた

しかし真は片手をあげ反射した

「やるねーしかし」といい風を放ってきた

「な、多重能力だと」

と言いつつなんとか避けたしかしさらに炎を投げつけてきた

「あぶねー」

と言いつつテレポートしなんとか避けた

「しょーがない」

と言いつつ両手をあげた片手には火もう片手には風そして男は両方同時に放ったすると、炎をまとっている竜巻ができた

「なに!!!」

と言いつつ真は片手を上げその攻撃を反射しようとしたが反射できない

（チツ、しかたない）

と思いつつ真の後ろにベクトルを変えた

ドガン

となり後ろを見ると森林が少し消えていた

（なんつう、火力だよと）

と考えてるとき男はもう2発めの準備をしていた

（あの火力だあたったらアウトだろ。反射できないならこれだ）

真は片手をあげたその時に男は2発目を放ってきたしかし真はその
竜巻レーザーのようなものはなつた

「なに！」

男は火力を上げようとしたときに竜巻は消滅していた

「破壊力だけならお前の竜巻より上だとおもっぜ」

「まさか、メルトダウンーだと」

「い」名答

真はレポートで男の前に行き顔面を殴り飛ばした

（時間がねーなまず戻るか）

そう考え真は皆のもとへもどつた

第13話(後書き)

更新が遅いですがこれからもみてくださーい

あとコメントと感想もください

第13話外伝（前書き）

どうぞ

第13話外伝

これは、神矢真が学園都市を離れてる時の物語

この物語の主人公黒桜春はファミレスにいた当然涙子と初春とだ

「そういえば、黒桜さんは知ってますか？レベルアップ事件のこと」

初春が急にそんなことを言いまじめな顔でこちらを見ている

「なんだそりゃ」

と春は返したすると初春が説明を始めたんだかここ最近起きてる事件の犯罪者のレベルとバンクに登録されてるレベルが違ったり使うと倒れたりするなどいろいろ言っていた

「そんなの、本当に出回ってんのかよ」

春はやる気なさそーに聞いた

「本当なんですよ。正体が音楽と言つとここまで捜査は進んでいるんですよ」

とちよつと怒りながら言った

「分かった分かったなあー涙子、初春そろそろここ出ようぜってどうした涙子」

なんか涙子が不安そうな顔をしていた

「私、用事あるの忘れていて悪いけど今日は帰るね」と言いどこかへ行ってしまった

初春達も今日は解散と言つことで帰ったしかし次の日春にとって大

きな事件が起こる

次の日いつもメールをくれる涙子からメールがこなかったその時はまだそんなに大きなもんだいだとは思ってなかった

それから数時間後涙子から突然電話が来た

「おーす涙子朝メールくれないから心配したんだぞー」
と軽くいつもの調子で言った春しかし涙子わ泣いていた

「どうした？」

と心配そうに聞くと涙子は言った

「レベルアップ使った」

「なに？」

そう言うことしかできなかった

「私も倒れちゃうのかな。でも私そんなの知らなくて春怖いよー」
そっぴい泣いてたでも春はこう言った

「大丈夫だぜ！言ったたる涙子と初めてあつた時にお前を守るっ
てだから俺に全部任せてお前は安心して少し休みな。絶対たすけて
やるからだつてお前は俺の1番大事な人だから」
と春も泣きながら言った

「うん、わかったありがたいがとうまってるよ」
と言い電話が切れた

その後春は倒れていた涙子を見つけたすぐに病院に運ばれたが意識

不明の重体だった

「くそ!!!」

と春は壁を殴りつけた

そしてすさまじい殺気で言った

「やった奴はゆるさねー!!!」

その後すぐにジャツジメントの支部にもどり調べていたところ初春が木山と言う人に呼び出された

数分後信じられない事実が判明したそう木山がレベルアップを作り上げた超本人だったことをそして初春が人質にとられたことを

「こいつが犯人か」

と静かに言い支部から出ようとした時白井が

「どこにいくんですの」

と聞いてきた

「木山のところ」

と静かに言った

「だめですの」

と白井が言いかけた時に白井は言葉をとめたそれは春から放たれる殺気が強すぎ足がすくんだのだ

「木山の野郎は俺がたたきつぶす」

と春は言い歩きだした彼は戦場にむかい大切な人を取り戻すために

続
く

第13話外伝（後書き）

次回は木山との戦いです

第14話(前書き)

じいぢい

第14話

春は今タクシーの中にいた

(くそ、あの女が涙子をやったんだ。)
そう思うだけで怒りがこみ上げてくる。その時春の携帯がなった。
春はめんどくさそうにでてこう言った

「今は取り込み中だ。」

あとでかけ直してくれ」

そして電話を切った。

それから3分後木山のいる場所へたどり着いた。

そこで春が見たものは

「なんだよこれ」

そう、アンチスキルが全滅していたのだ。

春の背後に木山がいた

「木山、てめえ能力者だったのか」

そう言った直後春は思いだした

(こいつは、レベルアップパーを作り上げた女だ。なら、レベルアップパーで能力者になってもおかしくはない)
そう考えていたときに木山が話しかけてきた

「まさか、君も私を止めに来たのか？」

そうゆっくりとつけた

だが春は木山えお睨みつけ言い放った

「止めにきたんじゃねーよ。潰しに来たんだよ!!!」
そう叫び木山の方に走っていった

「元気の言い子だな。でも、元気だけで私には勝てんよ」
そう言い木山は鎌鼬を放った。

春はそれを避けマスタースパークを放った。しかし木山はバリアー
か何かで防いだ

「まさか、今ので全力なんて拍子抜けなこと言うなよ」
木山は手を前にかざし風を起こした。春は辛うじて避けたが。さら
に炎を投げつけてきた

「パイロキネシス!?!」
それをなんとかマスタースパークで打ち消した。

「てめえ、まさか多重能力者か?」

「そのとうり」
案外簡単にそう返してきた。

「私は目的を達成したいだけなのだよ。」
そう言い頭を抑えた木山

「ふざけんなよ。てめえのかってな目的だけで何人も人を苦しめた
んだよ!!!」

春の眼には怒りと言う名の強い意志がうつっていた。

「けつきよく君も私の邪魔をするんだね」
そう言い木山は氷のつららのような物を数十本放ってきた

「あぶねーな!!」

そう言いながらも砂鉄を操りすべて砕いた

「こつちからもお返しだ。」

と言い両手に光を操ってく

「くられ、ダブルスパーク」

と言いマスタースパークを二本出した。

しかし木山はほとんどダメージジウけてなかった

「どうしたそんなものか？」

木山光を集め放ってきたしかも、威力は春ほどでないもののスピードが段違いに早かった

春は辛うじて衝動をずらし交わしたが当たったら即死だっただろう

「私には時間がない次の一撃できめる!」

木山は手を上にかざした。その瞬間どんどん光が集まりでかくなっていく

(こりゃーまずいぜ)

そう思いながらも春も片手を顔の前に上げた

「終わりだ!!」

木山巨大な光を春に打ってきた。春も手に光を集めていた。無謀だとわかっていても友達のためそして、涙子のために

「ファイナルスパーク!!」

と言い今までよりも大きな光をはなった。

二つの光がぶつかりあい勝敗がけつした

そこにたつてたのは春だった。

気絶した木山を見ていた。

しかし、その後彼が眼にしたものは巨大な怪物だった

「胎児だと」

その胎児は大きな声で叫んだ。

続く

第14話（後書き）

次でレベルアップ編終了です。

第15話(前書き)

じいじ

第15話

春は今、謎のモンスターの前にいた。

(こいつもレベルアップで作られたのか)

そう考えていた時めのまえの胎児が叫び声をあげた。その瞬間大きな衝撃破が襲った。

あまりの爆風に春は後ろに吹き飛んだ

「ぐはあああ」

体の全身に痛みが回った

(くっそ、体力がもたね)

春に胎児の手のような物が伸びる。

春はその手にマスタースパークを打ち込んだ。しかし、手はすぐに再生した

(くっそのままじゃやられちまう)

そこで、春は声をかけられた。

「春さん!!」

と、声する方へ振り返るとそこには、初春がいた。

「なんで、来たんだよ?」

その時、突然胎児が、動き始めた。

「どこに行くんだ?」

春が、疑問に思った時に初春が叫んだ。

「あれは、原子力発電所?」

そう、胎児は原子力発電所に向かって動き始めたのだ。

「初春は隠れてる!」

春が言い胎児を止めに行こうとした時「春さん?」

と呼び止められた。初春は話し始めた。木山のことや、レベルアップ

パーの止め方などを。

『分かった、初春が、レベルアップを解除するんだ。頼んだぞ。』

『春さんは？』

『奴を止める』

そう言う春は、胎児に向かって、走り出した。

春はマスタースパークを放った。

『おい、化けものさんよお。お前の相手はこの俺だあ？』

戦い始める春、しかし、相手の攻撃に苦戦していた。

『くっそがあああ？』

しかし、春の腹に氷の塊のような物が、飛んできた。春はマスター

スパークで相殺したが、欠片が、春の腹に直撃した。

『ぐあああ！』

腹を抑えて、膝をついてしまった春、そこに胎児はさらに、攻撃を加えた。

『ぐはあああ？』

春は、もう身動きできる状態ではなかった。胎児は最後の1撃を加えようとしてた。

『くっ！ここまでか。』

春が、あきらめかけた時に謎の音楽がながれた。胎児の動きがとまった。春は、立ちあがった。そして、最後の力を使い原子力発電所の電気を全て自分の身体に吸収した。

『喰らえ！これが、最強の1撃？』

春は片手に全てんを賭けた。

『ファイナルマスタースパーク？？』

最強の1撃を放った。胎児を叫び声をあげて、跡形も無く吹っ飛んだ。春は少し笑いその場に倒れた。

続く

第16話(前書き)

久しぶりの投稿です。

第16話

黒桜春は現在病院の一室にいる。

「馬鹿野郎」

神矢真はキレながら春に言った。

春は今、数力所足や腕などを折る重傷なのだ。

「まあ、そう怒るなよ」

春はいつも通りの調子で言ったが真は春の頭を叩いた。

「いつてーな、それが怪我人に対する態度か？」

春はそういったが真は椅子を立ち上がりこう言った

「佐天のためとは言え無理しすぎだなお前は。ちよつと頭冷やせ」

春は反省はしてた。いくら彼女のためとは言え、AIMバーストと言う化け物と対立し、大怪我をおったのだから。

「すまない。」

春はそうかえすしかなかった。

「まあ、お前はお前の理由で戦ったんたからな。真は大切な人の為と言う事は理解していた。

「本当に、お前は無理しすぎだぜ。俺にも頼れるよ。

一人で背負い込むなよ？」

真は、春に伝えたいことをストレートに伝えた

「まじで、ごめん」

春は、俯きながら謝った。

「お前、すっかり休んどけよ。あと、お前佐天さんのこと大事にするよ」

真は、少し笑って言った。

春は、しっかりと頷き真の顔をしっかりとした眼差しで見つめた

真が帰ったあと春は考えていた。
自分がとった行動は正しかったのか？
と同じ考えが頭をぐるぐると回った。

（涙子を守るのは俺しかいないんだ。俺がこのざままでどつする？
もつと強くなるなくちやいけなない。

いや、強くなる理由があるんだ？

俺は、強くなる絶対にな？）

春は、しっかりとした答えを見つけ。

それをやり通す決意をした。

春は、ベッドに潜り込みそのまま眠りについた。

第16話(後書き)

今回は、デュララの折原臨也をだします。

第17話(前書き)

臨也がでてきます。

ちなみに、臨也は、真と同一年と言っ設定です。

第17話

現在時刻は10時だ。

とあるビルの屋上に問題の男がいた。

男は、携帯で誰かと話してるようだった。

「あは、確かにね。実に面白いね。」

男は、陽気な声で話していた。

「うん、それじゃあまたね？」

男は、電話を切ると。

膝の上に乗っけていた大トロがネタの寿司を手にとり一個口に含んだ。

「やっぱ、大トロ」

男は、ニコニコしながら言い街を眺めながら言った。

「ここが、学園都市か〜ふふ、すごく面白い事が起きそうだ」

不気味な笑みを浮かべたこの男。

名前は、折原臨也と言う情報屋である。

この男の登場により物語は大きく傾く

翌日

神谷 真は街を歩いていた。

「あーあ、夏休みって言ってもやることないんだよな」

今日は、本当に暇だった。

春は、入院中だし。

けいおん部のみんなは練習だし。

やることが本当にないのである。

ふあ〜と真があくびをしたところで。
真は、不良達が女からかつあげをしてるのを見かけた。
それも、いつもの路地裏でだ。

「やれやれ、俺の出番かな？」
と言い一歩歩きだした時に彼の背中に気配を感じた。

「いやあ〜学園都市でも不良はいるんだ〜」
と言い真の横に立った。

「あの子を助けるのかい？」
と男は、真に聞いた

「え？助けますけど？」
真は、不思議な感覚がした。
初対面なのに、友達のように話しかけてくるこの男を

「それじゃあ俺も手伝うよ」
と言い真の肩をつかみ投げとばした。

「うわあ？」
真は、女の子の前にちょうど立った。

「んだ？てめえ」
不良は機嫌の悪そうにガンをつけてきた。

「いじめ、かつこ悪い」
男がこちらに歩いてきながら言った。

「アア？」

不良は、視線を男の方にかえて睨みつけた。

「実によくない」

男は、不良を完全にバカにしていた。

「てめえ、死にたい様だな？」

不良は、構えていた。

「おー、怖い怖いww」

男は、依然ポケットに手をつ込み立ったままだった。

「てめえ？死ねごらあ？」

不良は、男に殴りかかった。

しかし、男は、軽々と不良の攻撃を避けてクルクル回っていた

「降参」

男は、ニヤリと笑った。

「くっ、てめえ？」

不良は、男を睨んでいたが。

不良は、あることに気づいた。

髪がない……

ハゲてる事に

男は、なにかをしたのだ。

「俺の、髪がああ？」

不良は、ぎゃあぎゃあ騒いでいたので。

男と、真と、少女はその場をあとにした。

第17話（後書き）

ちよつとデユラララを意識しすぎたかもしれません。
次回は、この話の続きです。

第18話(前書き)

続きです。

第18話

不良からなんとか逃げてきて今、真達は大通りにいた。

「いや〜大丈夫だった？」

ファーコートを着た黒髪の男が真に聞いた。

「あ、はい。俺は、大丈夫ですけど」
チラリと真は女子の方を見た

「私も一応大丈夫です。」
少女は一息ついて言った。

「それはよかった。おっと申し遅れたね、俺は、折原 臨也。
よろしく」

男は、笑いながら言った。

「あ、俺は、神谷 真です。」
真は、頭を下げながら言った。
少女も、真に続いて名前を言った。

「瘡^{くさへ} 愛^{あい}花^かです。」

少女は、背が低く顔が整っている。

美人と言うよりは可愛いと言う方が正しいだろう。

「ここは、超能力者がいっぱいいるんでしょう？怖いねえ」
と臨也が言った瞬間光弾が臨也に飛んできてモロにヒットし臨也は
吹っ飛んだ。

「臨也さん？」

真は、光弾が飛んできた方を見ると先程の不良が立っていた。

「貴様ら？俺の髪を奪つといて生きて帰れと思ったか？」

不良は、めちやくちやキレていた。

真は、絶対時間を発動しようと身構えた時に臨也は立ち上がりコートの砂ぼこりを幌っていた。

「ふうーん。これが超能力か？すごく面白いね」

臨也は、上機嫌な感じで言った。

真は、疑問に思った。

光弾をモロに喰らったのにけろつとしていることを。

「てめえ手加減すればいい気になりやがって？」

不良は、連続で放ったが臨也は難なくすべての光弾を避けていた。

「あははは。実に面白いね」

臨也は、一気に不良との距離を縮めると不良の腹辺りをなにかで切り裂いた。

「ぐふつ、貴様？」

臨也の手元にはナイフがありそのナイフもてあそびながら臨也は言った。

「一応さ〜警告ね」

あんたは、俺と戦っても勝てない。怪我する前に俺を見逃してよ
臨也は、クスリと笑いながら言った。

不良は、ふざけるな？と叫び臨也に殴り掛かった

しかし、臨也は普通に避け。ガラ空きの首元に肘で一発いれた。

不良の、動きがとまりその場に不良は気を失って倒れた。

「あの、臨也さん。」
真は、不良を見ながら臨也を呼んだ。

「ん？あーあやっっちゃったよ。」

まあ、相手から殴ってきたんだからしょうがないよね。」

臨也は、ナイフをしまい言った。

「ジャツジメントが来る前に逃げましょう」

真は、臨也と愛花を引つ張り走った。

「この街にはジャツジメントって言うのもいるんだ
ある程度逃げたところで臨也が」

「今日は、いろいろ見れたし。満足だ俺は帰るよ。」

臨也は、真にそう言い歩いていってしまった。

「私も、そろそろ帰らなくちゃ。今日はありがとございました。
と言い愛花は走っていった。」

「なんか、今日は疲れた帰るか」

真は、いつも以上に疲れた様子で歩いていった。

その夜

臨也は部屋のパソコンに目を通しながら言った。

「あれが、絶対時間の持ち主神谷 真か……」

臨也は、ニヤリと笑いながらパソコンを見て

「楽しみだな」

と一言言いパソコンの電源を消した。

第18話（後書き）

臨也は、基本的には悪役にしようかと思ってます。

こっちの世界でもいろんな事件の黒幕としてでてくるんでよろしく
お願いします。

第19話(前書き)

一方通行編突入です？

第19話

「あー、だりい」

神谷 真は街を歩きながら一言つぶやいた。

昨日折原 臨也と言う謎の男に会い振り回されただけでさえ疲れているのに。

今日もくそ暑いのがから真も流石に嫌になった。

「ん？あれは上条じゃね」

自動販売機の近くで話しをしていた

上条はなんやら二千円が飲まれたとかなんとか騒いでる声でした。

「相変わらず不幸だな」

真は、苦笑していると。

上条の近くに少女がいるのを見た。

(あれは確か：超電磁砲の御坂美琴？)

真は、一度全ての能力と能力者の顔を確認しているのであの少女が御坂美琴だと言うことが簡単に分かった。

遠目で見ると御坂美琴の方が突然自動販売機を蹴った

「ちえいさー！」

すると上条の二千円札はでてこなかったが大量のジュースがポンポンでてきた。

「な、あの〜ビリビリ？」

上条は、冷や汗をかきながら言った。

「あたしにはビリビリじゃなくて御坂美琴って名前があんの？」

御坂は上条に指を指しながら言った。
上条が、どうしたものかと辺りを見渡した時に上条の目に真の姿が入った。

「おい。真、このジュース少し飲んでくるね？」
上条は、即座に真に声をかけた。

「久しぶりだな、上ヤン。」
真は、軽く上条の近くまで歩いてきた。
御坂が、上条に誰？って聞いた

「あ？初めて会ったんだっけ。紹介するよ俺のクラスメートの神谷真だ」

上条が神谷のことを紹介したので、真は前にでてよろしくと一言だけ言った。

「よろしく。あたしは…」
御坂が名前を言おうとした時に、真が

「御坂 美琴さんですよね？」
と言った。

「なんで知ってるの？」
御坂は疑問に思い真に聞いた。

「そりゃ、常盤台のレベル5だ有名ですからね」
真は、顔では笑っていたが心では笑ってはなかった

(常盤台なんて、興味ねえ)
とか考えていただろう

「まあ、ジュース貰うな。上条」

真は、ジュースに手を付けようとした瞬間表情が固まった
明らかに不味そうなジュースが多いのだ。

(これは、ある意味罰ゲームに近いな)

真は、とにかくまともそうなジュースを取ろうとしたが、ないのだ
まともなものが皆無なのだ。

「と、とりあえず…きなこ練乳ってやつ貰うよ…」

あからさまに外道なやつをあえて手にとった

(俺の、勘よ当たってくれ?)

真は、恐る恐るきなこ練乳を口に含んだ。結果はもちろん外れだっ
た。

不味いと言うか飲み物か? って感じだった。

真が、きなこ練乳に再挑戦しようともう一口飲もうとした時、御坂
が二人いるように見えた。

(やべえついに幻覚が…)

しかし、二人いる。

「御坂美琴が二人?」

と真は言った。

上条も同じことを思っていたのか真と顔を見合わせるた。

「…お姉様」

もう1人の御坂が喋りはじめた。

「あんた?なんでここにいるのよ?」

御坂は怒ってるように怒鳴った

「歩いていたらお姉様を見かけたので話しかけて見ましたとミサカは…」

美琴は、もう1人の御坂の肩を掴んで

「はいはい、ちょっと来ないさいね〜」

と言いどっかに言ってしまった。

「俺も、帰って昼寝するわー」

と真は、上条に手を振って帰ってしまった。

残された上条と大量のジュースは虚しく家に帰ろうとしていた。

続く

第20話(前書き)

アクセラレータの登場です。

第20話

神谷 真が上条達と戯れていた。

泉 劉夜は街歩いていた。

「唯は今日は練習だし暇だな」
コンビニで買ったサンドイッチを食べながらつぶやいた。
その時、路地裏から轟音がなった。

(なんの音だ?)

劉夜は音がなった路地裏に走っていった。

「なんだこれは!?!」

そこには、少女が血まみれになって倒れていた。

「君?大丈夫か」

劉夜は、息を確かめたが止まっていた。
死んでる…

「アア、なんだアてめえはヨオ」

不意に後ろから声がした。

劉夜は、振り向いた。

そこには、白い髪の化け物がいた。

「これを才見ちまったんだ。覚悟はできてるよなア?」
白い髪の男は首の骨をぼきぼき鳴らしていた。

「これは、君がやったのか…」

許さない？」

劉夜は、自身の能力ウォーターバスター水流砲撃の力を使い水を白い髪の男に当てた。しかし、男に当たったはずの水はすべて劉夜の方にもどってきた

「くっ？」

水を全部かわしたが白い髪の男が目の前に何故かいた。

「ぶつとべえ？」

白い髪の男の強烈な拳が劉夜のあばら辺りに直撃した。

「ぐはあ？」

劉夜は階段に吹っ飛んで突き抜けた。

「くそお？」

劉夜は男に蹴りをいれたが鈍い音が劉夜の足から聞こえた。

「なっ！？ぐわあああ？」

足の骨が折れて蹲っている劉夜にさらに蹴り殴りを白い髪の男はした。

「あははははは？」

劉夜は、完全に意識を失っていた。

「飽きたわあ。」

白い髪の男はそう言うのと帰っていった。

「…ま…ずい…」

劉夜は、血まみれになりながらも這いつくばったがそのまま意識を失った。

第20話（後書き）

劉夜が可哀想ですけど、真が頑張ってください。
次回もお楽しみに？

第21話(前書き)

今回は臨也がメインです。

第21話

神谷真は現在部屋で昼寝をしている。

真の携帯の着信音が静かな部屋にながれた。

「うるせえな」

真は携帯を開いた途端唯の泣き声が聞こえた。

「あ、どうした唯」

真は、なにかしたっけ？と思いながら唯に聞いた。

「劉ちゃん…血まみれ…うっぐ」

劉夜さんが血まみれ？なんだいったい。

「おい？今どこにいるんだ？」

「真ちゃんの家の近くの病院」

あそこかと思いつっていった。

数分後

真は病院に着くと劉夜の事を手術していると思われる部屋の前に来ていた。

唯は泣きじゃくっておりけいおん部のみんなは下を見て俯いていた。

「なにがあつたんだ？」

真は梓に聞いた。

「分からない…部活の練習をしていたら連絡がきたの」

真は、分からない事が多かった

(なんで、劉夜さんほどの人が……
いったい誰に)

真は、考えてると

不意に声を掛けられた

「あ、君は真君じゃないか」

後ろを振り向くとそこには臨也が立っていた。

「臨也さん！？なんでここに？」

真は驚いて。尻餅をつきそうになった。

「あの、血まみれの少年、君の友達かな？」

臨也は、軽い調子で聞いた。

「あ、はい。俺の先輩で……」

臨也は、少し笑ながら言った。

「一応、その少年を見つけたのは俺だ。

血まみれになって路地裏に倒れているものだからね」

臨也は、オペ室の方を見て言った。

「あ、ありがとうございます」

真は、深々と臨也に頭を下げた

「あ、いやいや俺は人として当然なことをしただけさ」

臨也はいつもの調子で真に言った。

、

臨也の携帯の着信音が鳴り臨也は慌てて携帯をとりだすと

「あ、すまない。失礼するよ」
と言い走りだして行ってしまった。
臨也は、携帯に耳をあてると

「もしもし」
と言った。

電話越しの男は一回ため息をつくと臨也に仕事の話だと面倒くさそうに言った。

「君から、電話が掛ってきてる時点で分かってるよ…それでなにが起こってるんだい？」

臨也は、少し雰囲気を変えると電話越しの男は一回しか言わないよ？と言いつ話し始めた

『君がいる学園都市で最悪の実験が行われている』

「最悪の実験？なに？ゴキブリの解剖とか？」

臨也は、馬鹿なことを言っただけだが電話越しの男は普通にスル―した。

『学園都市の第一位アクセラレータをレベル6にするための実験だ。』

臨也は、それを聞いて少し笑いながら話しの続きを聞こうとした。

『それも、第三位のクローンを殺すことでのレベル6になると言う卑劣な実験…いや一方的なリンチだ。』

「それで？仕事ってのはなんなの？」

臨也は、説明を聞いたがあまり興味がわかなかった。

クローンは人のような感情はない、臨也は人が好きでそれが趣味の

情報屋を営んでいるのだ。

『ああ、今日も行われるが。その実験を妨害してほしい。』

「なるほど…君も随分嫌な性格だねえ」

臨也はからかうかのように言ったがやはり電話越しの男はスルーである。

『やり方は簡単だクローンを拉致れそれで終わりだ。』
簡単な仕事だ。本当に面白くない。

「んで日時は？」

臨也は、とりあえず早めに終わらせたいので時間を聞いた。

『今日の6時30分からだ。』

あと約3時間後…

臨也は、少し考えた。

この仕事は臨也がうけてもあまり意味はないが…

(学園都市、最強か…面白そう)

臨也は、電話越しの男に情報ありがとうとだけ言って電話をきった。

「ふふ、楽しみだな楽しみだな楽しみだな」

臨也は、病院の屋上でクルクル回りながら笑っていた。

あと3時間…

第21話(後書き)

次回は、臨也とアクセラレータが戦います。

第22話(前書き)

臨也中心です。

第22話

ウザそうでウザくないでもちよつとうざい情報屋、折原臨也は自宅
でなにやらパソコンを見つめていた。

「ふむ、今日の実験はもう、使われていない工場で行われるのか…」
臨也はボロい工場の画像を見ながらため息を一回ついた。

「俺には、まったくメリツトないよな。今回の仕事…」
そう言うと臨也は机に乗っていた。ブレスレットを見ていた。
この、ブレスレットは魔具と呼ばれる特殊な道具であり臨也が使う
武器の一つでもあった。

「この、魔具でも勝てないだろうな…」
アクセラレータは実に面白いが、そうとう危険だ」
いつもはへらへらしている臨也は今日は妙に緊張感を持っていた。

あと、一時間で実験は始まる
臨也はいつものコートを羽織り
家からでた。

40分後

廃工場についた臨也はとりあえず、御坂妹を探すことにした。

(まったく、本当に面倒だな)
臨也は、御坂妹らしき人影を見つけるといつも通りの調子で話しを
かけた。

「やあ、君が御坂さんかい？」

臨也は、爽やか？な笑顔で御坂妹に話しかけた。

「？はいとミサカは一言で返答します」
臨也は、ニヤリと笑うと

「じゃあ、少し眠ってよ」

と言い睡眠薬のついたハンカチを御坂妹に押し付け眠らせた

「さてさて、アクセラレータさんってのはどこなんだろう？」

一方アクセラレータは廃工場の段差になってる場所に腰掛けていた。

(ああ？時間になっても奴がこねエドオなってるんだア？)
アクセラレータは予想外の自体に対処しきれてなかった。
不意に足音が廃工場に鳴り響いた。

「君が、アクセラレータ君か…真っ白」

臨也は、いつもの挑発する態度だった。

「んだア？てめえ」

アクセラレータは臨也の喋り方などに腹をたてながら言った。

「俺は、折原臨也、君の今回の相手だ」

「はあ？頭おかしいのかア？まア、そんなに殺されたいなら望み通りにスクラップにしてやるオかああ！？」

臨也は、少し嘲笑して続けた。

「おー怖い怖い

流石最強だね」

オーラが違うよww」

「殺す？」

アクセラレータは堪忍袋の尾が切れたのか臨也に超スピードで突っ込んできた。

臨也は魔具の力を借りて高速移動をしてアクセラレータの突進をかわした。

しかし、アクセラレータは地面を壊し臨也に向かい壊れた岩の塊を蹴り臨也に当てようとした。

臨也はまたもや魔具の第二の力を使い結界をはった

岩は臨也の前で全て粉々になったがアクセラレータは続けて更に距離を縮めて臨也に強烈な蹴りを放った結界を打ち破るような蹴りに臨也は吹っ飛んで瓦礫の山に頭から突き刺さった。

「おいおい手応えねえな」

アクセラレータは頭を抑えながら言った。

「ふう、結構聞いたよ

」
チツとアクセラレータは舌打ちし

「てめえはとつとと死ね？」

と言ってまた、突進してきた。

「はあ、君は結構単細胞なんだね」

と言っつと臨也は懐からナイフを取り出しアクセラレータと交わった瞬間に振るった

アクセラレータの肩辺りから血が流れていた。

「あ？どついつことだ？」

（あー、なるほどこれならアクセラレータに勝てるかもしれないね）

臨也は、考えたがこれ以上の戦いは無駄だと思い。

あとずさり

「お疲れ」

と一言言い高速移動を使い逃げた。

「てめえ？逃がすか？」

と言い追いかけたが臨也は既に姿を消していた。

（なぜだ！？俺がなんでダメージを受けてるんだよオ？）
アクセラレータは地団駄を踏み当たりようのない怒りを一気に放出させた。

その結果廃工場は跡形もなく消しさっていた。

一方逃亡者臨也は御坂妹を抱き上げて歩いていた。

「まあ、アクセラレータ君の力も見れたし結果オーライか」
月な綺麗な夜に心が歪んでいる情報屋は微笑んだ

第22話（後書き）

次回は御坂妹と臨也の会話です。

第23話(前書き)

臨也がメインです。

第23話

折原 臨也（21歳）は自宅にいた。

ソファーには中学生くらいの女の子が寝ており、臨也はパソコンをいじりながらコーヒーを飲んでいた。

「…ん？ここは…」

御坂妹が目を覚ました様だった。

見覚えのない部屋にいたので、少し困惑してしまったが頭を少し整理して、目の前の男に声をかけることにした。

「あの…」

臨也は気づいたのか、ソファーの方に椅子を動かして、優しく頼んだ（ように見えた）

「大丈夫？ごめんね」

仕事のために実験妨害しちゃって」

臨也は、上っ面では申し訳ないように見えるが心から言ってるのかは分からない。

御坂妹は少し驚いていた。

「どうして、こんな事をしたのですか？とミサカは少し驚いて聞きます」

その言葉に臨也は吹き出した

「ぶっ、あはははは。

君は本当に面白いね」

顔に表情をださないうで驚いてるって」

臨也は、本当に笑っていた。

御坂妹はなぜだか少し笑っていた。
そして、ある感情が芽生えていた。

（ミサカは死ななくてすんだ？）
と

御坂妹は今まで自分は実験のために生まれてきた模造品だったと思
っていた。

しかし、この男は明らかに自分のことを人間のように扱っている

「あー、久しぶりに大爆笑だよ
君のこと気に入ったってえ!？」

臨也は、予想外のできごとに素で驚いてしまった。
御坂妹が泣いていた。

感情を持たない模造品が初めて泣いたのだ。

「あ、あれ？なぜミサカは泣いてるのですか？」
それは、御坂妹自身も予想外だった。

「君は、もうクローンじゃない人間だ」
臨也も、本当の優しさを御坂妹に見せた。

「そうですか…これが感情なんですね」
御坂妹は、臨也の顔見て涙を流していた。

（…なんだかな〜
調子くるうつてか）

臨也は、拉致ったことにより感謝されていた。
今までは、ウザいとか言われていたのに

臨也は、最低御坂妹を殺すことまで考えていたのに、そんなことはもうできなくなってしまった。なぜなら目の前にいるのは人形ではなく彼がもっとも愛してる「人」だからである。

「大丈夫さ…」

ここにいれば絶対に殺されない。

もう、君は安全さ」

臨也は、御坂妹を慰めるように言った。

この日から臨也は良くも悪くも大きく変わることになる

第23話（後書き）

臨也がいい人になってしまったWW

今回は、真の視点からです。

第24話(前書き)

どうだい？

第24話

臨也が一方通行と戦ってるころ真は街中とぼとぼと歩いていった。

(劉夜さんはやられるし臨也さんは消えちゃうのでここ数日いろいろ起こりすぎだ)

真は、この学園都市でなにかが起きてると言うことだけ理解していた。

その時上条当麻が真の前を走っていった。

「おい？上条」

真は当麻に話しをかけた

「んあ？真じゃないか」

当麻は少し笑いながら言った

「どうした？そんなに急いで」

真は上条に尋ねた

「これから御坂に会いに行くんだ。

今、学園都市ではとんでもないことが起こってる」

上条はそう言うともたまたま走っていった。

「おい？待てよ？」

真も追いかけた

数分後

上条と真は常盤台の前にいた。

とりあえず、中に入り御坂いると思われる部屋のインターフォンを鳴らした

『はい、どなたですか？』

「上条と言うものですけど、御坂美琴さんはおらっしゃいますか？」
上条は少し緊張気味に言った。

『今は、おりませんが部屋にはいつて待ってくださいまし』
上条と真は初めてお嬢様学校の内部に潜入したww

部屋の前に立つと真はノックをした。

「どござ

中から聞き覚えのある声が聞こえた。

「おじゃましますってあああああ？」

真は驚いて声をあげた。

「あ、あなたはあの時の殿方ですか？」

そう、この少女はジャッジメントの白井黒子であった。

「いや〜久しぶりですね…不良の時はありがとうございました。」
真は年下の少女に敬語でなぜか話した。

「あ、いやいや、私の方が助けられましたし」
なんか、お互い敬語なので会話がおかしい
上条はその妙な光景をぼかんと見てるしかできなかった。

コッコッ

廊下から足音が聞こえた。

「はっ？寮監様ですか？

隠れてくださいまし？」

真と上条は狭いベッドの下に入れられてしまった。

真は奇妙なぬいぐるみを見て苦笑いしていたが首元辺りに紙があるのに気がついた。

「なんだこれは！？」

真は、実験の紙を見てしまっていた。

「俺にも見せろ？」

上条が紙をとって見たが反応は真と一緒にだった。

上条と真は急いで寮からでると

「俺は、御坂を探してくる？」

「なら俺は、時間稼ぎをしてくるぜ」

真も勢いよく返答した。

「お互い」

「絶対に」

「死ぬなよ？」

二人はそう言うと別々の方向に走っていった。

第24話(後書き)

感想待ってます？

第25話(前書き)

真とアクセラレータが激突します。

第25話

神谷真は漆黒の夜を走り抜けていた。

(くそ？間に合えよ？)

真は、今実験を止めに実験場に向かっていた。いや、正確には時間稼ぎが目的である。

上条当麻が御坂美琴と話しをつけるまでの時間稼ぎである。

しかし、真の唯一の弱点15分しか戦えないとなるとある意味無謀な賭けだった。

(それでも、俺はこんな実験は認めない？)

真は、列車の操車場に着いた。

ここが10032回目の実験場らしい。

その実験場からは既に戦いの跡が見られた。

真は急いでフェンスに登り実験場に侵入しアクセラレータを探し始めた。

その頃

アクセラレータは御坂妹に圧勝と言ってもいいくらい簡単に勝っていた。

倒れている御坂妹の腹に蹴りをいれて笑っていた。

しかし、その瞬間後ろから神谷真が拳を振り下ろしていた。ガキン？

妙な音がしアクセラレータは少し後退していた。

「ちっ、んだアてめえはよオ。不意打ちとはいい度胸じゃねえかア」
アクセラレータは不適な笑みを浮かべていた。

「貴様こそ、なにやってんだか知らないけどさく女の子の腹蹴って笑ってるとかちよつとした変態さんですか？」
真はあえてアクセラレータを挑発した。

「…殺す？」

アクセラレータは地面に足を叩きつけた。

その瞬間地面が揺れ始め地割れをおこした。

真は、同じ反射を使い地割れで発生したものを全てなぎ払った。

「んだア、その能力はよオ。ふざけやがって」

アクセラレータ蹴力のベクトルを変え一気に突っこんだ。

（来た？）

真は、エネルギーで作った刀を構えアクセラレータに向かって走った。

「うおおおお？」

真が、刀を振り下ろした瞬間爆発が起き二人は後ろに吹っ飛ばされコンテナにぶつかった。

「くはア！？」

アクセラレータは驚いていた。

（なぜだ！？なんで俺が吹っ飛ばされんだよオ??）

あまりの怒りにぶつかったコンテナを蹴り飛ばした。

真が行なったのは簡単な事だった。

真は、ベクトル変化を使いアクセラレータと必ず相打ちになるよう設定し、刀を振り下ろしたと同時に爆発使いの能力を発動させ。お互いを吹っ飛ばしたのである。

真にも、大きなダメージはあるがアクセラレータにもダメージを与

えることができるまさに諸刃の剣のような危険な技であった。

(くそ?いくら時間稼ぎつつつてもあと7分くらいしか能力は開放できない。一気に攻めるしかない?)

真は立ち上がり真っ向から走っていった。

「ばかがあ?」

アクセラレータが蹴り飛ばそうとした瞬間、真はテレポートを使いアクセラレータの背後に回った。

アクセラレータはベクトル変化を使い回し蹴りを放った

真もそれと同時に拳を振り下ろした。

二つが激突し地面が地割れを起こし、さらに周りの列車などが爆風で全てとんでいった。

(こいつ?反射を使ってるのにびくともしないだと?なにものだア)
アクセラレータは力負けし後ろに吹っ飛んだ。

「があ?ごほつ貴様」

アクセラレータは冷静さを失っていた。

目の前にいる奴はなぜか反射が効かないからだ。

しかし、真も余裕はなかったなぜなら残り時間が少ないからだ。

アクセラレータは一気に距離をつめ真にパンチを放った。

真はかるうじてガードしたが力負けし後退してしまった。

アクセラレータは容赦なく連続攻撃を放ったが真も負けず殴り返す。

そして、遂に15分がすぎてしまった。

(まずい?)

アクセラレータの拳が真の頬にヒットした。

「ぐわあ？」

真は大きく吹き飛ばされコンテナを突き破り地面に転がった。
神谷真は本当にただのレベル0になってしまっていた。

続く

第25話（後書き）

次回は無能力者、神谷真と超能力者、アクセラレータの戦いの続きです。

上条さんも登場します？

第26話(前書き)

今回は短いです。

第26話

神谷真は絶対絶命のピンチだった。

絶対時間の効果が切れてしまっただけのレベル0になっていた。

「おいおい、動きが急に鈍くなったじゃねえかア。どうしたア？」
アクセラレータは電車の線路のベクトルを変え真に連続で鉄を放った。

真は走ってギリギリのところだからうじて避けたが。
アクセラレータは既に目の前にいた。

「おらア？」

アクセラレータは真の腹に蹴りを放った。

大きく真は後ろに後退した。

真の口からは血が吐き出されていた。

(うっ、早く上条の野郎来やがれ…
もう限界だぜ)

「けっ、簡単に死んでもらっちゃ困るからよあえて、手加減したのにまだ戦う気かよオ…」

次は殺すぜエ」

アクセラレータはよろよろとこちら側に歩いてきた。

(やべえ、立てねえ？

いや、体が動かねえ？)

真が全てを覚悟した時英雄は姿を表した。

「お前、俺の友達から離れろって言うてんだよ？」

上条は、いつもの感じとは違うオーラをだしていた。
まるで、殺気だった。

上条とアクセラレータの戦いが幕を開けようとしていた。

第26話（後書き）

次回は、真が覚醒します。

第27話(前書き)

エ (一) エ (一) エ

第27話

上条とアクセラレータが戦い始め数分が経っていた。
アクセラレータは当然の如く上条をおしていた。

「どオしたア？さっきまでの勢いはよオ」
アクセラレータは余裕表情だったが上条はもう限界寸前立っているのもやっとなだつた。

「てめえはよくやったよ…だから、とつとと楽になれえ？」
アクセラレータは一気に距離を詰め上条を殺しにかかった。

「く、くそお？」

上条は叫び、闇雲にアクセラレータを殴った。
誰もが上条は勝てないと判断するこの状況で奇跡は起こった。

「ぐぼアあ？」
アクセラレータが吹き飛ばされていたのだ。
驚いたのアクセラレータだけではなく上条も目をぱちくりさせていた。

「なんだよ？なんだ？なんですかア？愉快に素敵に決まっちゃったよ…お前はア？」

アクセラレータは手を前に構えつつこんだしかし、上条はよろよろながらすっかりかわし、右拳でアクセラレータの顔面を殴った。

(17、175)

「がはア？ごぼ」

上条は殴り続けながら考えた。

(もしかして、めっちゃくちゃ弱い?)

アクセラレータは蹴力のベクトルを変え高くジャンプした。

「ちくしょう…こんなことがア」

アクセラレータは歩きながらつぶやいた。

「負けたことがないか…戦いに負けたことがない奴が喧嘩のやりかたなんて知ってるはずがないよな？」

「吠えてんじゃねえよ？三下がア？」

アクセラレータは線路を浮き上がらせたが上条はそれを利用し、アクセラレータに拳を振り下ろした。

「がは？」

アクセラレータは標識に背中をついた。

「お前は、御坂妹達を殺してきたけどあいつらだって精一杯生きてきたんだぞ？」上条はアクセラレータに言ったがアクセラレータは立ち上がり。

笑いながら言った。

「精一杯生きてきたア？あはははは
笑わせるなア？」

アクセラレータは上条を睨むと謎の言葉を発した。

「くきかくかこけきくかきかかかかか？」

アクセラレータの頭上には大量のプラズマが蓄積されていた。

「殺せ？」

そう言うとプラズマは四方八方に分解され上条に向かっていった。当たれば死ぬ。

しかし、上条の幻想殺しでは全ては防ぎきれない。

上条は覚悟し目をつぶったが衝撃がこない恐る恐る目を開けるとそこには。

「御坂妹？」

そう、御坂妹にプラズマが当たっていた。

「なぜだか、ミサカは貴方を…たす…け」
御坂妹は意識を失った。

息はしてるが、確実に危ない状態だろう。

少し離れた所から見ていた真は言葉を失っていた。

真の頭の中にはいろんな考えが生まれていた。

（死んだ？いや？生きはあるか？でも、ヤバいだろう。なんで俺がいかなかった？俺がいつてたらあの子があんなことには…俺の力が足りなかったから？いや、仕方ないだろう？

この感情はなんだ？

怒り？悲しみ？哀れみ？なんなんだ？

理解できない。

俺は、いつたい？いつたい？

真は頭を抑えて。

叫び声を上げた。

「うぐぐ…うわあああ？」

真の周りの物が全て吹き飛び真の背中からは紅い真紅の羽が生えていた。

いや、羽と言うよりオーラと言う方が当たっているだろう。

「くっくっ…D…E…A…T…H」

真は確かにDeathと言った。

その瞬間アクセラレータの背後に真は回っていた。

「なっ…」

アクセラレータが振り向きざまとした。

だが、真はアクセラレータの頭を持ち地面に押し付けた。

メリメリ

「がばあぁ」

アクセラレータは気を失い白目をむいていた。

「は？」

上条は驚き、間抜けな声をだした。

真は、上条達の方を向くと真っ正面からつつこんできた。

「うおおお？」

上条は真に向かって走っていき右手を握りしめ真に拳を振った。

ものすごい轟音が鳴り響き上条は吹き飛ばされた。

「ぐは？」

しかし、真も気を失い倒れていた。

(…なんだ今の?)

そう、真の不気味なほど強大な力を上条は目の当たりにしてしまった。

今回の事件が意外な形で終息した。

第27話（後書き）

なんか、パツとしない終わり方ですいません。
次回は新キャラだします。

第28話(前書き)

ジュン

第28話

神谷真は現在病院の一室にいた。

真には頭を巡った妙な感覚の後から記憶が消えていて、気づいたら病室にいますと言う状況だった。

「なんなんだ？ いったい…」

真は、本当に全てが疑問だった。

その時、病室のドアが開いた。

「あなた…大丈夫なの？」

そこに立っていたのは御坂美琴だった。

「ああ、身体の方はなんの問題はないぜ…何ヶ所か骨を折ったけどね」

真は、少し笑っていったが御坂は深刻そうな顔していた。

（この人のあの力はいったいなんだ？ アクセラレータを一発で瀕死に追い込むなんて普通じゃないわ）

御坂は、真のことを完全に警戒していたが、真は

「あの…大丈夫？」

「え？ だ、大丈夫よ」

御坂は、ちよつと驚いて言った。

ここの病室に御坂が来る数分前に上条の部屋に行っていた御坂は上条にこう言われたのであった。

「御坂…真にあの力のこと黙っていてくれないか？」

と

真の暴走により事件は解決したが、それに加え疑問もしようじた。

「真にも、事情があつたんだよ…あの暴走の事を真に聞いたらあいつにも悪いだろ」

上条は、たんたんと話していた。

やはり、上条当麻はお人好しである。

自分もひどい怪我であるのにもかかわらず来てても人の事を気にするなどある意味異常だ。

だが、御坂は上条の言う事に従った。

「分かったわ。んじゃあんたはしっかり身体を休ませなさい。またね」

と言つて部屋を出たが御坂はやはりあの暴走が気になつてしようが無かつた。

そして、現在に至るわけだが。

御坂の脳裏にはやはり、謎と疑問があつた。

しかし、御坂は気にしても仕方がないとあえて、開き直り真に買ってきたクツキーを渡した。

「わざわざ、あんたのために買ってきたんだから。感謝しなさい。」
御坂は、やはりツンデレっぽく言ったがあえて、神谷真は、

「ありがとよ。」
と短く返した。

「なによ、無愛想ね〜」

真は、あははと笑いクツキーを口の中に投げ入れた。

「ふんふん、これ手作り？」

真は、もぐもぐしながら言った。

「違うわよ？」

御坂は、必死で否定したが。

真は、少し微笑んでごめんごめんと言った。

「御坂妹は大丈夫だったのか？」

真は、真剣な顔になって言った。

「あ、うん、一応命に別状はないらしいわよ」

真は、天井を見て。

「良かった良かった。」

安堵の顔を浮かべて言った。

「それじゃあ、私は行くね。お大事に」

御坂はドアに手をかけて言った。

「ありがとな。御坂さん」

「御坂でいいわよ。」

と言い部屋をでた。

真は御坂が出るのを確認するとベッドに身体を預けて。

(俺は、学園都市の闇を見たのかもな)と考えると眠りについた。

第28話（後書き）

都合により新キャラ出せませんでした。

次の回には必ずだしますので、よろしくお願いします。

第29話(前書き)

新キャラの登場と過去編に突入です？

第29話

真とアクセラレータの激戦から3日がたった。

黒桜春は退院し、現在学園都市から離れたところにいた。そう、ここは池袋と言つ街であつた。

春は、中学生時代の友達を待つていた。

「待たせたな…」
と言つて。

春の横に立つたこの少年こそが春の友達である。

名前は、平沢優と言つこの少年。

そう、平沢唯の弟であり平沢憂の兄である。

見た目は金髪で不良っぽいが「今は」不良ではない。

「久しぶりだな。優：変わりなかつたか？」

春は、優の肩に手を置き言つた。

「まあな、いつも一人で家にいるだけで退屈だけだな。」

優は、唯と憂が学園都市に行つてる上に親がほとんど海外旅行に行つてるためにいつも、一人で留守番をしていた。

いや、本当にこの池袋を離れられないのは理由があつた。

あれは、約一年前であつた。

黒桜春がまだ中3だつたころの話だ。

春と優は地元では有名なちよつと困つた問題児であつた。

春も、現在は黒色の神だが茶髪で無免許運転とか普通にしような

最悪にたちが悪い不良であった。

優は、毎日が喧嘩三昧、学校では喧嘩し講師すら投げたりもしたし。下校中には路上で不良と喧嘩。さらには、春とも殴りあいをし。心身ともに毎日ボロボロだった。

そんなある日、優の前に一人の少女が現れた。その日も喧嘩しボロボロの格好で学校に登校した。周りの女子や男子は怖がり優には近寄らなかつた。優も、自分が不良なのは自覚してたし、みんなと仲良くなることなんて既に諦めていた。

（ちつ、どいつもこいつも俺を軽蔑しやがって？）
なぜか彼は怒りと言う感情が込み上げていた。
その時だった。

「大丈夫？ひどい怪我してるね？」
とちよつと怖がりながらも話しをかけた少女がいた。

「え？あ、ああ別にたいしたこと無いさ。」
優は驚いていた。
なぜ、俺に話しをかけられるのか。
と大方そんな考えが頭をぐるぐる回ってただろう。

「君が、平沢優君かい？」
と後ろから声をかけられた。
そこには黒色の髪をした少年が立っていた。

少女の名前が滝川由香理と言って。

少年は折原臨也と言う名前であった。

これは、運命なのか、必然の出来事なのか。

そう、彼平沢優の人生を大きく覆す出来事が起こる前置きだったの
だろうか？

第29話（後書き）

次回も過去編です。

もしかしたら当分過去編になるかもです。

第30話（前書き）

今回も過去編です。

ちなみに、優のイメージはデュラララの平和島静雄です。

第30話

舞台は戻って学園都市。

折原臨也は神矢真の病室に見舞いに来ていた。

「いや、まさか、君があのアクセラレータと戦うとはねえ。」
臨也は相変わらずの調子で言っていた。

「俺は、友達を助けるたかつただけなんです。」
真は、俯きながら言っていた。
ある意味、上条達に迷惑を掛けたからだ。
アクセラレータと戦い、負けて。
さらには、記憶を失い倒れるなど完全に足でまといであった。

「まあ、相手は学園都市最強のレベル5だからねえ。
仕方ないよね。」
臨也は、コーヒー牛乳を飲みながら言っていたが。
実際は、臨也もアクセラレータの強さは目の当たりにしているので、
その力を超えた真の力の方が興味があった。

「まあ、その話しは置いてさ…黒桜春君って学園都市にいる
よね？」

「あ、はい…この病院に入院してたんですけど、退院しちゃって
真は、申し訳なさそうに話していた。」

「あ、大丈夫大丈夫。」
臨也は、窓を見ながら答えた。

「あの？春とは知り合いで？」
真は、疑問に思っていたことをそのまま口にだした。

「まあね。中学生時代の悪友とでも言っておこうかな」
臨也は、懐かしいなと思いついて話していた。

「あの～その話し良かったら聞かせてくれませんか？」
真は、春の過去や臨也と春の関係などを知りたくて言った。

「ん？聞きたいかい？別にいいけどね … 確か、約一年前だったかな？」

一年前：
来神中学校の屋上にいた、折原臨也、平沢優、黒桜春は昼食をとっていた。

「って言うかさあ～ほんとに優ちゃんって喧嘩ばっかしてるよねえ」
臨也は、チョココロネを食べながら言っていた。

「てめえに、ちゃん付けて呼ばれたくねえな…あと、俺も喧嘩したくてしてる訳じゃねえよ」
優は、空を見ながら言った。

「いつも、チンピラ共が目付きが悪いとか、肩当たったとかくだらない理由で喧嘩すっかけてくるんだぜ？勘弁してほしいぜまったく…」
優は、本当は皆と仲良くもなりたいし人を傷つけるのも嫌な人間だった。

しかし、喧嘩が喧嘩を呼びことごとくはダルマ式に膨れ上がった。
気づけば、周りからは不良扱い。チンピラや不良などからは完全に

敵視されていた。

そんな中で、黒桜春は唯一の親友いや、悪友と呼べる間柄であった。昔から仲は良かったが喧嘩する時は必ず優の味方になったし。優が髪を染めると、春も染めて一緒に金髪にもしてくれた。さらには、折原臨也や滝川由香里のような自分を心配してくれる人達もいた。

(なんだかんだ言っただけ俺は、巡ってるのか?)

優は、自分のことが嫌いで嫌いで仕方がなかったが、なぜか心は穏やかだった。

(ずっと、平和が続けばいいのにな。)

優は、空を見上げてそう思っていた。

しかし、彼の考えも理想も思ったとおりにはならなかった。夏休みにはいると由香里と優は2人きりで会ったりしていた。

ある日優は

「なあ、由香里？」

「うん？」

由香里は、優のマジメな顔を見て少し驚いていた。

「なんで、お前は俺と一緒にいるんだ？」

「怖くないのか？」

優は、自分を不良や最悪の人間だと思っていた…いや、実際そうだと確信していた。

「怖くないよ…むしろ……」

由香里は、顔を上げて。

「好きだから」

としつかり言った。

優も戸惑ったが気持ちは一緒だった。

「なら、俺も由香里の悲しい時は一緒に泣くし、嬉しい時は一緒に喜び…だから、俺と一緒にいてくれ。」
こうして、優と由香里は、付き合い始めた。

しかし、彼の日常はやはり、喧嘩三昧であった。

毎日のように殴り合い毎日のようにボロボロになりながらしかし、彼は成長していった。

いつしか、彼は来神中最強と呼ばれていた。

そんなある日、「桜火組」と言うカラーギャングのメンバーが優と喧嘩をした。

当然のことだが優は圧勝した。

しかし、その不良は妙な事を言い残した。

「槍真さんなら…貴様を倒せるぜ」
と言い、不良は気絶した。

(槍真？聞いたことがあるな)

優は、臨也に電話を掛けた。

なぜなら、彼はこの街の情報ならなんでも知っているような人だからだ。

『もしもし』

「なあ、槍真つて名前知っているか？」
単刀直入に聞いた優。

『もちろんだよ えつとね…桜火組のリーダーで本名は紅 槍真だねえ〜二年前に組織を立ち上げて、若いながらリーダーになったらしいね、さらには、喧嘩の実力は一年前の時点でもほとんどの組織を単独で潰したほどねえ』

臨也は、怖い怖いと笑いながら優に言った。

「なるほどな…」

『さらに、俺らと同じ年で来神中学校に通ってるってことは…』

優は一人心当たりがあった

前、由香里が紅 槍真に大怪我を負わされたと、喧嘩に巻き込まれて怪我をしたと…

「ま、まさか…由香里が危ない？」

『へ？』

優は、携帯を切ると走っていった。

(ま、まさか、由香里が?)

優は、全力で由香里の家に向かったが途中で電話が掛かってきた。

『もしもし。ああ、君が平沢優君かい？』

電話越しの男は驚くほど冷静な声だった。

「お前が…まさか」

優の頭に嫌な予感がよぎった。

『ご明答…僕が紅 槍真だ…』

「てめえ、由香里をどうした？」

優は怒りが込み上げていた。
すでに、爆発寸前であった。

『この娘にはなにもしてないし…するつもりもない。でも、君が僕
のいる所まで来ない場合はどうなるか分かるよねえ』
電話越しの男は嫌に不気味であった…そして、圧倒的な威圧感もあ
った。

『来良公園で待ってる…ま、た、ね』

優はちくしょうと叫び近くにあった標識を蹴り壊すと恐ろしい殺気で

「殺す？」

と言い走っていった。

第30話（後書き）

なんか、いろいろと長くなってしまいました。すみません。

ご意見や感想待ってます？

第31話(前書き)

ジュン

第31話

夜中の公園。

時刻は、19時位であった。

桜火組のリーダー。

紅 槍真は、由香里に話しをかけていた。

「まったく、度胸のある女だね。相変わらず。」

「・・・」

由香里は、確かにこの男の喧嘩に巻き込まれて怪我をしたが、決して槍真に怪我させられた訳では無かった。

話しは、1年前ほどにさかのぼる。

喧嘩帰りの槍真は、コーヒー牛乳を飲みながら、夜の道を歩いていた。

「まったく、僕も喧嘩ばかりしたい訳じゃないのに……」

「だったら、しなければいいんじゃない？」

後ろを見た所には、コンビニの袋を持った、女がいた。

それが、由香里との出会いだった。

現在に戻り

槍真は、月を見ながら、つぶやいた。

「今回は、優とやら真仲間の仇をとらなきゃいけないからな…」
槍真は、顔を上げ桜火組のメンバーに言った。

「お前ら、覚悟はできたか？」

メンバーは、槍真を見て。

「おおー？」

と叫んだ。

その瞬間、公園に轟音がなり響いた。

「おおおん？」

「そうまああああ？」

優は、木を蹴り倒し叫んでいた。

「来たか…」

「らあああ？」

優は、素手で桜火組のメンバーに突っ込んでいった。

メンバーの一人はバットで殴り込んだ。

しかし、優は軽々と避け、優はひたすら拳をストレートに放った。

殴られたメンバーは、空中を舞って落ちていった。

「はあああ…ふう。

うりゃあああああ」

殴り蹴りの連発。

そんな単純な行動こそメンバーにとっては、一番の恐怖になっていた。

中には、悲鳴を上げて逃げる者もいた。

しかし、槍真は、それを焦る事なく至って冷静に見ていた。

（奴の戦い方はまるっきりルールがない…）

ありや、完全な喧嘩スタイルだ。）
優は、難しい事は一切してない。
ただ、拳を振り回し、蹴りを放ち、力いっぱい投げる。
それが、彼のスタイルである。

(…仕方ない)

槍真は、ベルトにさしていた鉄パイプをゆっくり引き抜き、立ち上がった。

そして、そこから思いつきりジャンプをした。

そして、優に槍真はまっすぐ落ちていった。

「はあ？」

優の頭めがけて、槍真は鉄パイプを振り落とした。

ゴン

と鈍い音がして、優は倒れた。

「今だ、やれ？」

優は、困まれリンチ状態になり。

蹴り殴りをされていた。

しかし、優は不適に笑っていた。

悪魔の笑みだ。

ドゴン???

爆発音が公園…いや、街に響いた。

優の周りのチンピラ共は全員吹き飛ばされ、落ちてきていた。

優は、力いっぱい地面を殴ったのだ。

その衝撃で、周りの者を吹き飛ばしたと言う、単純だが、とても恐ろしい事を行った。

(ありえない…)

槍真は、部下を見て啞然としていた。

「そおおおうまあああ？」

最強の喧嘩人と、カラーギャングのリーダーの戦いの火蓋は落とされたのであった。

続く

第32話(前書き)

ジュジュ。

第32話

紅槍真は、ゆっくりと鉄パイプを拾い上げ、少し振り回し重量確認をしてから優に言った。

「あんたの、喧嘩スタイルやその馬鹿げた桁外れの力…やはりあんたは化け物さ。けどな、仲間を傷つけられたからには、その落とし前くらいつけないとなああ？」

槍真は走りだし、鉄パイプを横に振った、優は片腕で鉄パイプを防いだ。

ゴン？

鈍い音がり、優は顔をしかめた。

しかし、優はもう片方の拳で槍真の顔面を狙いストレートにパンチを放った。

槍真はスレスレでかわし、少し距離をとった。

(奴のパンチは、確かに早く正確だが、僕の反射神経なら?)

優は、槍真に走っていき、蹴りパンチ裏拳の順番で技をだしたが、全てよけられていた。

「おいおい、優くんよお、てめえの自慢のパワーも当たんなきゃ意味がないぜ」

と言うと槍真は鉄パイプを上から下に振り落とた、優は片腕でガードした。

しかし

「腹がガラ空きだぜ？」

槍真は、優のみぞに蹴りをいれた。

「ぐっ？」

優は、少し吹っ飛び、倒れこんだ。

「はっはっはっ？最強の不良もそんなもんかよ、そんな力じゃ誰も守れやしないぜ？」

槍真は、笑っていると優は立ち上がり、鬼の形相で言った。

「今、なんつった？」

「ああっ？」

「今、なんつったって聞いてるんだよお？」

優は、アッパーを放った、今までとは比べものにならないスピードで槍真はかわしきれず、顎に優の拳が食い込んだ。

槍真は宙を舞い、そのまま地面に落ちた。

「ハアハア？」

「くっ、ちくしょうおもしれえよ？」

槍真は立ち上がり、言った。

そして、よろよろと優に近づくと鉄パイプを狂気の如く振り回した。
ゴンゴンゴン

優はかわそうともせず鉄パイプにあたり続けた。

（んだあ。こいつ、なんでかわさない？）

「貴様、なんでかわさねえ？」

優は、小さい声で

「ねえよ……」

「あ？」

「かわす必要なんてねえってんだよおおお？」

優は、槍真に向かい拳を放った。

槍真は、鉄パイプで防ごうとした、しかし優の拳は鉄パイプもろとも砕いた。

（ば、ばかな？）

槍真は、すこし距離をとり、優を見た。

（信じられない…なんで、鉄パイプを砕けるんだよ。）

槍真の、頭の中はすでに混乱していた。

ありえないと言う気持ちと恐怖でぐちゃぐちゃだったのだろう。

しかし、優も余裕はなかった。

頭か、大量の出血をしており、歩くのもままならず、すこし、めまいもしていた。

（く、頭いてえ…なんか、ふらふらするしよお。早く終わらせないとマズいな…）

槍真は、仮にも桜火組のリーダーだ、そこまでの実力者は喧嘩に対して、絶望する事も恐怖することも今まで無かった。

「そおおまああ？俺も疲れてきたからよお、早いところ決着をつけようや？」

優は、槍真の顔面に拳を放った、槍真はギリギリのところまで避けて、カウンターを放った、カウンターは優に直撃したが、優は怯まず蹴りをいれた。

「がはあ」

槍真は、溝に蹴りをいれられ、思わず声をあげた。しかし、槍真も負けずと反転し、優の顔面に拳を放った。ガゴツ。

鈍い音がした、おそらくアゴにでも入ったのだろう。

まるで、ボクシング選手の戦いだっただ。

お互い身体がボロボロなのにそれでも殴り続ける。

由香里は、その姿を見て涙を流していた。

「もうやめてよお？」

由香里の涙ながらの叫び声、優達は由香里の方を振り返った。

「すまねえな……」

優は由香里に一言だけいい、槍真の方を向いた。

「そおおまああ？」

「ゆうゆう？」

2人の拳が交差した。

立っていたのは、一人の大切な一言を守ろうとし、だった一人でカライギヤングの組織に挑んだ。

平沢優と言う男だった。

第33話（前巻）

ふんふん？

第33話

平沢優と紅槍真が戦闘中…

公園からは少し離れたビルの屋上で喧嘩を見ていた女がいた。

「ふふ…槍真君は頑張ってみたいね」

その女は笑ながらつぶやいた。

ブルル

女の携帯が鳴った。

「もしもし？」

電話から聞こえたのはモザイクがかかった声だった。

『例の話したが』

「あは、あなたから電話がかかってきたって事は交渉の方は成功したのかしら？」

女は、これ以上にないくらいの笑みで言った。

しかし、その笑みは悪魔のようだった。

『ああ、お前は新生桜火組のリーダーだ。もう、紅槍真は使えないからねえ。』

「分かっているじゃない。あの男は戦いを見てる限りはもう終わりだね。負けるよ。」

『まあ、君も同じにならないように頑張りなよ』
『ふふと笑ながら女は言った。』

「あんなクズみたいな男と一緒にしないでよ。利用してるだけなんだからさ。」

『健闘を祈るよ』

「ありがとね、甘楽」

女は電話を切ると夜空を見ながら言った。

「この町最強の男にも弱点はある…ふふ、私がすべてのカラーギヤングを支配するのよ」

女は、ポケットから銃器を取り出して言った。

甘楽…

そう、その名前の正体とは…

「そろそろ限界だねえ」

携帯をいじりながら男は歩いていた。

「俺も動くか…」

男は、フードを深くかぶり目的地に歩きだした。

第34話

夜道…

平沢優と滝川由香理と言う2人が歩いていた。

「だ、大丈夫？優くんその怪我」

由香里が心配そうに優の顔を覗き込んだ。

「心配すんなかすり傷だよ」

(とは言ってもフラフラするわ)

と、軽い感じに思っていたが、それは優だからこそそのスキルとも言えた。

ただでさえ頭から血を流しているのにも関わらず、さらに身体全身に傷口や怪我のあとがよく見られるこの状態で普通に歩いていられるのだから、化物である。

(ちっ、フラフラするし、由香里もこのまま帰らせるのも危険か…)

「おい？由香里。」

「ん？どしたの優？」

「今日はもう遅いし俺んちに泊まっていけ」

由香里は驚いて、悪いよ。

と断ろうとしたが、優の怪我を見るとやはりこのままにしておく
と一大事になりかねないので、優の家に泊まる事にした。

優宅…

「ただいまあ〜」

「お帰り？遅かったねお兄ちゃん」

といい、エプロン姿ででてきたのは平沢優の妹平沢憂だった。

「っってお兄ちゃん、どうしたのその怪我？」

「ああ、喧嘩でね。」

たいしたことないぜ

と言いかけた時、優は倒れた。

意識が飛び。

気がついた時にはベッドの上だった。

(うう…倒れちゃったのか？俺…ちくしょう頭がガンガンしやがる)
時計を見ると、11時ちよい過ぎくらいだった。

(一時間くらい気絶してたのか。)

優の頭には包帯が巻かれており身体にもシップやら絆創膏などで手当をされていた。

(なんか、水飲みたいな…)

優はベッドから立ち上がり一回に行った。

(ん？風呂の明かりが付いてる憂か？)

「おい、憂？…え？」

そこには、裸の由香里の姿が、あった。

「あ、え…これは勘違いでしたww」
きゃーっと言う叫び声が深夜の一軒家に広がった。

「お兄ちゃん？お風呂をノックもしないで入ろうとするなんて、常識を考えてよ」

「ゴメン…もつともな意見だ…」
憂はため息をついたあといつもの調子で

「私はいいから、由香里さんにあやまってきてね。」
というと、台所に向かって行った。

由香里は二階のベランダにいた。

「由香里、ちょっといいか？」

「うん…」

由香里はすぐに顔をうつむけてしまい、とても気まずい空気流れた。

（うう……どうすれば。）

つてか気まずすぎだろ…）

優は、こんな気まずい状況始めてなので戸惑いを隠せない様子だった。

（よし？悩んでも仕方ねえ？）

「なあ？」

「ねえ？」

2人の声が、重なった。

「あ…先にどうぞ。」

「あのさ、私の裸…どこまで見た？」

由香里はうつむいたまま質問した。

「どこまでって…背中とか、あと少し胸とか」

優はやけにカタコトな感じで答えた。

「胸…どうだった？」

(あわわわ…とんでもない質問してきやがった…)
優は少し考えると。

「大きかったな…うん。」

優はプルプル震えながら言った。

由香里はクスッとわらってしまった。

「優、一生懸命すぎだよ？ww」

由香里はわらっていた

「え？あの怒ってないの？」

「最初から怒ってなかったよ？ただ恥ずかしくて…」
優
は内心ホッとしたものの、やはり覗いてしまった罪悪感は消えず少し、涙目になってらいた。

(もう、お風呂をかってに開けるのはやめよう…)

「ん？どうしたの？優：ボーツとしちゃって？」

由香里は不思議そうな顔して訪ねてきたが、優は笑ながら「なんでもないよ」と答え自分の部屋に戻った。

…その頃

「甘楽」はチャットしていた。

甘楽：しかし、参っちゃいました。まさか紅リーダーが負けちゃうなんて。

カラクリ：仕方ないんじゃないかな？やっぱりあんな化け物相手じゃ、流石の紅リーダーも…

甘楽：紅リーダー、情報によると永久通報とか何とか

カラクリ：仕方ないんよな…だって、負けちゃったし…

サガ：こんにちふおん！

甘楽：あ、サガさんこんにちふおん！

カラクリ：ういっす

サガ：紅リーダーの次にリーダーは誰になるんでしょうね？

カラクリ：さあ？多分幹部級の奴らじゃないかな？

甘楽：まあ、必然的にそうなりますけど。もしかしたら起こるかも
しれませんよ…

カラクリ：なにが？

甘楽、サガ：革命と言う新たな神話が…

甘楽さんが、ログアウトしました。

サガさんが、ログアウトしました。

カラクリ：革命…

カラクリ：くだらないねえ…

カラクリさんが、ログアウトしました。

夜は深けてく…

第35話

「おらあ！」

ガタイの良い不良が槍真を殴った

まだ、早朝…

永久通報と決まった槍真は、「納得いかねえ」と不良達に戦いを挑んだものの、多勢に無勢。

まさに、血まみれだった。

槍真は、ただでさえ優との喧嘩の傷が癒えてない状態。

戦略を一人で半減させた所で上出来だろう。ただ、相手が悪かった。

「おいおい…天下の紅ちゃんが、まさか優くんにも負け、俺らにものされちまうなんてよ…情けねえ事この上ないよなあ？」
不良は舌をだしながら馬鹿にした口調で槍真の顔を踏みつけた。

「き…さま。コウヤタカは…どうした？」

「あいつらあ？あいつらは俺らに反対して動かねえから…病院行きさ…」

ガタイのいい不良は、汚い笑顔を浮かべ唾を槍真に吐いた。

「き…きさま…」

「あん？」

槍真は不良の足を掴み

「きさまあああ？」

突然立ち上がり不良の顔面にストレートを叩きこんだ。

吹っ飛び近くにあるドラム缶に背中から突っ込んだ。

「はあはあ……」

槍真は拳から血が流れ、さらに手首は少し腫れていた。

その瞬間、全不良は

ほとんど身動きの取れない槍真に襲いかかった。

槍真は地面に倒れこみ、血を吐き。
全てを失った。

「……もういい！殺すな」

影から女が出てきた

槍真は意識が朦朧としながら。

しっかりと女を見ていた。

「あたしはよお、新生桜火組リーダー、橘 海菜だあ、よろしく紅
ちゃんよお」

そして、海菜は槍真の髪を引っ張り無理やり立たせ、耳元で何かを
呟き。

槍真をそのまま、アジトから外に投げ捨てた。

「うあ……あ」

槍真は声にならない声で、必死でなにかを呟いた。

太陽が出始め、

朝焼けになり。

人間達の日が始まる。

第36話(前書き)

いろいろな人物の視点です。

第36話

「ふあゝあ」

優は、大きなあくびをしながら、階段を降りていた。

（あんまり寝れなかったわ）

「おはようお兄ちゃん」

唐突に妹に挨拶をされた。

「おはよう憂」

優は頭をかきながら言った。

妹の、平沢憂とは同じ年だが、順番では優の方が兄である。

一番上には平沢唯と言う姉がいるが…

（これが、頼りないってかおっちょこちょいってか…）

現在、唯は学園都市のとある高校に在学中である。

憂と優も今の所は学園都市の高校に進学予定である。

「眠いな…あ、そっいえば由香里は？」

「由香里ちゃんならまだ寝てると思うよ？…もうすぐご飯できるし、お兄ちゃん起こしてきてよ。」

了解と言つと、寝ぼけ気味で階段を登っていった。

（大丈夫かな？）

唯と言うマイペースな姉と、優と言う喧嘩っ早い兄を持つ憂は、世界一大変な妹と言っても過言ではないだろう。

学園都市…

「へっくしょん！」

「大丈夫か？唯。」

おでこを出してる少女が、笑いながら聞いてきた。

「えへへ〜大丈夫大丈夫。」

「夏風邪だったら、ちゃんと薬飲んで寝てないと。」「黒髪ロングヘアの少女が心配そうに言ってきた。

「誰かが噂してるのかも。」
お嬢様な感じの雰囲気満載の少女がクスクスと笑いながら話していた。

「そうかもねえ…憂と優元気かなあ。」
平沢唯…けいおん部は今日も平和です。

—————

折原臨也視点

「あ〜実に興味深いな。」

彼が見てるのは桜火組のメンバーの資料である。

「まさに、神のいたずらだね…いや、むしろ必然かな？」

新たな桜火組リーダー、橘海菜は幹部でもなければ旧桜火組の関係者でもない。

所が、突然リーダーになっている。
理由は一つ。

この、折原臨也と言う男が甘楽と言うが偽名を使い全ての手続きを
していたのだ。

ガン？

臨也の家のドアが強引に開けられた。

そこには、火燐装と言うカラーギャングのリーダーらがいた。

「火燐装か…なんの用かな？」

パールを持った、火燐装のリーダーが、神妙な顔しながら尋ねた。

「あんたが、海菜をリーダーにする手続きしたんだろ？」

折原笑いながら、だったら？
と返した。

「あの女はガチでやべえって言ってたよな？なんでそんな事を？」

折原は、椅子から立ち上がると、満面の笑みでしっかりと伝えた。

「なんでそんな事を？そんなの決まってるじゃない？…だって情報屋だしww」
折原は、悪魔だ。

――――
海菜視点

携帯の着信音が鳴り響いた。

「もしもし、甘楽？」

「あー、例の取引なんだけどき、日にち変えてくれないかな？」
海菜は、少し迷った。
そして。

「条件次第だ…」
と伝えた。

「もっと、良い物をあげる…これでどうかな？」

「分かった…日にちは？」
海菜は、なるべく早く欲しかった物だが、ここはあえて引き下がった。

「うーんと、8月8日です。よろしく」
電話越しのノイズの掛かった声が気味悪く笑った。

「了解」

海菜も、笑いながら

「あなたには、恩もあるし、お互い目的のために。」
と言い電話を切った。

あははははははははははははははは？

海菜の悪魔の笑い声が響き渡った。

――

臨也は、ナイフを弄ぶながら言った。

「ねえ、君。さっきなんで海菜をリーダーにしたか聞いたよね？」
臨也は、血まみれの屍に向かって言った。

「ヒントは、天使の贈り物さ…ただし、墮天使…のね」
臨也は、笑いながら部屋を後にした。

第37話(前書き)

トイシ

第37話

路地裏、紅槍真はボロボロの身体を引きずり歩いていた。

声もまともに出せない状況。

さらに、路地裏にいる黒猫すらも哀れんだ目でこっちを見てる酷い様。

これが、元桜火組リーダーとは考え難い光景だった。

(くっそ…)

薄れる意識の中、槍真は倒れた。

(もう終わりだ…)

「ここが、池袋か。」

茶色の髪少年が、つぶやいた。

「ね！結構凄いでしょ？」

ツインテールで小柄な女の子が茶色の少年に語りかけた。

「ま、夏休み暇だったし、ちょうど良いかもな。梓」

そう、彼らは中学生時代の神矢真と中野梓だった。

なぜ、池袋にいるかと言うと数日前の話だった。

「は？池袋に行きたい？なんでまた？」

突然、梓は夏休み池袋について来て欲しいと真に頼んだ。

「ギターが置いてあったり、ライブがあったり…」

「でも、今外は危ないぜ、なんかカラーギャングとか言う物騒な連中が騒いでるって話だしよ。」

梓は下を向いてしまった、充分承知の沙汰だっただろう。

真は、ため息をつく。

分かった。

と言って結局ついて行く事になった。

（結局、断れなかった訳だが…）

真は街を見て驚いていた。

（外の都会って学園都市に負けず劣らずなんだな…）

真が関心していると。

梓が腕を引っ張って。

「早くと言うのでとりあえず引っ張られるがまま、ついて行く事にした。」

しばらくして、時間が経ち。

梓がジューズを買ってくるというので、真は待つことにした。

（なんか、普通だな昼間はカラーギャングとか出回らないのかな？）

真は唐突に、路地裏の方に目を向けた。

（ん？人の足？）

気になって路地裏の方に足を運ぶと…

「んな？」

そこには、血まみれになった少年がよこたわっていた。そもそも、人気の無い場所なので、真が見つけれられたのはある意味では偶然だろう。

（おいおい、息してんのかよ？やばくないか）
いかにも、重傷だろう。

生きてるのかも危うい。
息をしているのを確かめていると。

「真？」

梓が通りかかった。

「とうしたの？そんなところで…？」

梓も、気づいたのが驚きを隠せなかったらしい。

「梓？治療だ。」

「分かった？」

梓は、両手を少年に向けるとなにやらつぶやいた。
その瞬間なにか柔らかい光が少年を包んだ。

（梓の治癒御手は怪我人には最適の治療法だろ…）
しかし、

「真？怪我が多すぎて私の能力だけじゃ」
梓は治療を続けながら言った。

（仕方ない？絶対時間エンペラータイムスタート）

真の眼が真紅になり、真も何かをつぶやいた。

「真実たる、自然の治癒の力よ、涙たる記憶の裂け目を癒せ？」

自然の力を利用した能力、自然治癒の力を使い少年の怪我を根元から治癒した、外面は梓の能力で補足し、少年の怪我は軽傷と言えるところまで治っていた。

「よし、梓シップと包帯であとは大丈夫だ？」

真と梓は少年にシップと包帯は巻き、治療を終了させた。

「ふう…なんとか大丈夫そうだな。あとは目が覚めるまで木陰で休ませよう」

「そうだね。」

梓と真は少年を木陰まで運び、寝かせた。

（まったく、池袋ではなにが起こっているのやら…）

春、真、優、臨也、槍真。

彼らは、これから戦争が起こることをまだ予想もしてなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274m/>

とある学生の絶対時間(エンペラータイム)

2011年12月17日23時54分発行